

# IT水滸伝

星野たかし

本文 四百字詰原稿用紙に換算して三百四十五枚

## 「IT水滸伝」梗概

1986年から現在までのITの歴史を通して繰り広げられる人間物語<sup>ヒューマンストーリー</sup>です。

主人公小林たけしは、30歳でIT企業にエンジニアとして就職し、周りが自分より若い人ばかりの中で数々の差別と戦いながらも徐々に同志を増やしていきます。オリジナルの水滸伝では力と知恵はあるが当時の悪政のために阻害され差別された人たちが主役でした。そして、二十一世紀の今日も形は違えど同じような阻害、差別が存在します。

IT技術者は、得てしておたくと呼ばれ、恋愛には不器用と思われがちですが、多くの恋愛物語<sup>ラブストーリー</sup>が戦争から生まれているように、人が戦う所には必ず恋愛物語<sup>ラブストーリー</sup>があります。普段会社に寝泊りし、残業ばかりしているITおたくにもこんな恋愛物語<sup>ラブストーリー</sup>があったのかということを知りたいと星野と梨絵の恋愛を通じて知っていただきたく思います。

この物語は、長い物語です。1986年から1988年までの二年間を第一部としてこの物語だけでも読みきれるように完結させましたが、続いて第二部、第三部と続けて現在まで書く予定です。最終的には、情報革命の歴史を通しての人間ドラマを現在まで描き通したいと思っています。

# 目次

第一話	三十歳の新入社員
第二話	小林、発進
第三話	新体制
第四話	ごたごた
第五話	アメリカ出張
第六話	毘
第七話	オーストラリア旅行
第八話	独立
第九話	梨絵さん

## 第一話 三十歳の新入社員

1986年四月、大阪市内にあるコンピュータソフトハウスTES（テス）社で入社式が行われた。TESは田村弘明（五五才）が五年前に脱サラして作った会社で、当初は大型コンピュータ向けのソフトエンジニアを集めてM電器など地元の企業に派遣していた。事務所は大阪のビジネス街地下鉄本町駅より歩いて五分程のところにある七階建ての新しいビルの五階にあった。

一、二年前から派遣だけでは会社の特長が出せないの、丁度日本でもスタートしたばかりのパソコン用CAD（コンピュータ支援設計ソフト）に目をつけ、機械や建築用アプリケーション開発事業に乗り出したばかりであった。

現在従業員は派遣社員を含めて約30名、役員は田村弘明社長、妻の幸子専務、長男の道夫統括部長の三人で、後は営業課長に28才の崎田、汎用機技術課長に29才の東野、一年前に新設されたCAD技術課長に25才の守山がいた。

今年の入社式で社長室に集まった新入社員は五名で、すべて技術社員候補である。営業や総務は必要に応じて経験者を紹介や公募で取っていた。

技術社員の内訳は男子が四名、女子が一名で、紅一点は大学を卒業したばかりの社長の娘、梨絵である。そしてもう一人とても目立つ男がいた。

小林たけしは今年30才になる。彼は関西の私立大学の外国語各部を卒業後貿易商社に入ったが満足せずエンジニアの道を目指し夜間の専門学校に入って勉強した。そしてその学校紹介によって正規のテストと面接を受けて採用されたという経緯から新入社員として出席している。

家族役員が出席する中、長身でシルバーグレーの髪を七、三に分け、やさしい目をした田村社長が椅子からゆっくりと立って一同を見渡した。紺色黒縞スーツの胸のポケットにはいつものピンク色のハンカチが入っている。

「みなさん入社おめでとうございます。この会社も五年目を迎え、年々拡大を遂げております。昨年からは特にCADという新しい事業を展開しており、この中の何人かにも新しい事業に加わってもらうことになると思います。是非思う存分力を発揮していただきたいと思えます...」

次に息子の道夫統括部長（25才）が立った。頼りなさそうに目をうろろうろさせている。自分を落ち着かせるように喋る前にへへっと照れ笑いをするのが彼のくせだ。

「えーっと、統括部長の田村です。みんなおめでとう。社長が言ったように今年には新しい事業を本格的に展開することもあり、とても緊張して仕事をしています。...今からそれぞれの部署を発表しますから手を上げた上司のところへ、この後行ってください。田中紀夫君と岩田さとし君は、プログラム技術部、東野課長のところ。」

29才の東野課長が、右手をあげて合図した。

「町田信二君、小林たけし君、田村梨絵さんは新しいCAD技術部に行ってもらいます。守山課長。」

25才の守山が恥ずかしそうな笑いを浮かべて手をあげた。

T E S の事務所はビルの五階で総面積約 1 5 0 m<sup>2</sup>、部屋は小さく五部屋に区切って、それぞれ社長室、応接室、プログラム技術部、新設 C A D 技術部、営業兼総務部、になっている。それぞれが部と名乗っているが部長は統括部長の田村道夫一人で、実際は課長が管理する組織になっている。

新入社員の小林、町田、田村は C A D 技術部室内に入った。グレー色の事務机が二台向かい合うように、三列、直列に並べてあった。そして、部屋の奥にある一回り大きい課長の机は、管理職さながら、部下の机に対して一人一人が通れる程度離して、直角に置かれている。

昨年プログラム技術部から C A D 技術部が独立したときに、大きな部屋を間仕切り壁で二分して作った部屋で、まだ同じ台数の机がおけるくらいのスペースが余っていた。パソコンは机の上にはなく別のテーブルに二台並べてあった。当時パソコンと言えど、まだまだ高級品で一人一台ではなく交代交代で使用していた。

部屋には課長の守山以外に二名の先輩部員がいた。

銜え煙草の守山は仕事が忙しいというように新入社員が部屋に入ってくるのを見ても、自分の仕事をやめようせず、うろうろしていた。小林ら三名の新入社員は、煙草の匂いがする部屋の中に入ったところでじっと立っていた。しばらくして、守山が初めて気づいたようなしらじらしい振りで、

「お前ら、なにそこで立っとるんや。早いとこ座らんかい。」

三人の顔をまともに見ずに、煙草をちょっと手で摘んだだけでじゃまくさそうに言った。あわてて三人は机の前まで来たが、どの机が誰の机か解らない。

「誰がどの机かどこかに書いてありますでしょうか？」

一番年上の小林が遠慮しがちにたずねた。

「どこでもええよ。」

整理している本を、わざとらしく捲った。

仕方なく「レディースファースト」とか小林が軽い冗談を言って、今立っているところから、三人は歩いて奥から順番に着席した。横に三列ならんでいる机の課長席から近い順に田村、町田、小林と座った。田村と町田の向いには先輩社員がいたが、小林の前は空席であった。

小林は自分が一番年上であるという重苦しい雰囲気を感じながら、さっきから守山が機嫌が悪いのは、自分のせいではないかと思った。新入社員という身分で入社している以上、年下の先輩社員から、呼び捨てにされるくらいの覚悟はして来たが、逆に相手が遠慮するあまりに、重荷に感じ、遠ざけられるのではないかと心配になった。

「これは入社早々まずい」

と思った。と咄嗟に

「田村さん、席変わりましょうか？僕が課長に一番教えてもらわないといけないから。」

そう言って守山に一番近い席に元気よく歩いて行き田村と交代した。

「こいつ何者だ」

守山は急がしそうに必要なのない用事をしながらも顔が引きつって歪んでいた。守山は急

に別の用事を思い出したようにドアへ向かって歩き、振り向いた。

「おい君ちゃん、明日からトレーニング忘れんように。それから秋田、明日までにコーディング終われよ。」

そう言って出て行きかけてから急いで戻ってきて、

「このあと、7時から新入生歓迎会があるから、皆出席！」

と空中のあらぬ方向を見ながら言うと、逃げるように出て行った。

沖本君江は現在20才で、昨年入社したが、めきめき実力を伸ばし、現在お客さんに対するデモは、すべて彼女が行っている。中背で痩せ型、少しつりあがった黒ぶちのめがねをかけ、顔はいつもすずしそうな顔で、動きがきびきびとして無駄がない。

「トレーナーの沖本です。明日からよろしく。それから、こちらは秋田さん。」

痩せて気の弱そうな秋田が、ふらふらした足取りで机の前を整理していたが、下を向きながら頭をちょこっと下げて、合図のような挨拶をした。沖本君江は、先輩二人とは逆に、みんなの顔をしっかりと見回して、元気そうににっこりした。

歓迎会は、近くの居酒屋で行われた。30名が楽に座れる座敷を借りていた。七、八人ずつ向かい合って座れる長いテーブルが二脚置いてある。正面には社長、専務、部長の席が用意されている。

七時からスタートするはずであったが、十名くらいが仕事が残っているのか、客先に行っていて出席が遅れている。結局30分遅れでスタートした。

社長の歓迎挨拶の後、部長が新入社員を指名した。五人の新入社員は一人ずつその場に立って挨拶した。小林の番になった。

「小林君」

と年下の田村道夫部長が、呼びにくそうに言った。

「君はいろいろ社会経験があるので、面白い話があるんじゃないの？」

にやりと笑った。中肉中背の小林が元気よく立ち上がった。

「小林たけしと申します。今年30になります。」

といきなり切り出した。

「この年で、新入社員として入社したのは、プログラマーという職業が初めてだからです。何もわかりませんが、一所懸命に頑張りますので、みなさんよろしくお願いします。」

それだけ言ってさっさと座ってしまった。田村部長があわてて、

「おいおいもっと何かないんか？」

と言ったが小林は笑いながら手を横に振って別にありませんという合図をした。

こういう場所で過去の活躍をいろいろ話して、自分が年下の者から、なめられないように防御するべきなのだろうが、小林には、この会社に入る時に一つ大きな実験をしようと、心に誓っていた。技術者として、自分はずでに他の社員よりスタートが遅れている。早く技術を習得するために、自分の過去を一旦完全に消してしまおう。自分が年長だということや、過去の栄華や業績を、これから起こるであろう様々な問題の言い訳材料にしないように、封じ込めてしまおう。本物の実力をつけるために、一から頑張る。年下からどんなに屈辱的に扱われても耐える。

小林は今までの人生経験で、一つの結論を得ていた。どんなに自分を大きく見せようが、

いつかは等身大に戻る。大事なことは、人から言われたことに一々言葉で反論して自分を守るのではなく、むしろ自分を裸にして、真っ向から全身で相手にぶつかって行動で証明するしかない。自分が本物であれば、自然に何もこわいことはなくなる。時間はかかるが、結局実力のあるものが勝つ。そしてこの会社には、自分の過去を知る者は誰もいないので、丁度よい実験場になると思っていた。

小林はそのようなことを思い巡らしていたため顔は笑ってはいたがどことなくからかいにくい雰囲気は漂っていた。それ以上誰も質問しなかった。

「じゃ次、町田君」

町田は小林と体格は似ているが、普通より少し背が低く、黒ふちメガネのなかから、少し突き出た目をギョロッとさせている。

「えー、今回CAD技術に配属されました町田です。専門学校で二年間、コンピュータのことを勉強しましたが、CADは初めてです。趣味もコンピュータで、フォートラン、コボルはちょっと自信があります。家にNECのパソコンを持っていますので、家でも仕事ができます。」

コンピュータおたくと呼ばれそうな風貌でコンピュータのことは何でも聞いてくれという態度がありありと見えた。

「最後に紅一点田村さん」

部長は自分の妹を紹介するので少し照れくさそうに笑った。

「田村梨絵です。みなさんご存知だとは思いますが、そこにいる社長はじめ、専務、部長の長女です。」

このことが恥ずかしいことのように、申し訳なさそうに話した。唾を大きく飲んでからか細い声のボリュームをすこし上げた。

「でも家族から薦められたのではなく、私は自分でこの会社を選びました。大学は文科系でしたが、CADやグラフィックスに興味があったのでこの会社の試験を受けました。コンピュータのことはなにもわかりませんが、みなさんのおじさまにならないように、頑張っ、ついていきますので、よろしくお願ひします。」

そう言って頭を深く下げた、梨絵は小林の横に座っていたために、梨絵が頭を下げた時に、至近距離で梨絵の目と合ってしまった。

梨絵の頬が一瞬ピンクになった。とても素直で清楚という印象が、小林の頭からしばらく離れなかった。

新入社員の挨拶が終わり、客先に出かけていた社員もほぼ全員そろい、後は自由歓談になった。社長と専務は、遠慮して先に帰り、部長以下が残った。新入社員以外の席は、座布団がどこかに行ってしまったのか分からないくらい乱れて、あっちこっちにグループができていた。

新入社員の席は、五人が元の場所で静かに食事をしていた。小林の横には、町田と田村梨絵がいた。

「町田さんはコンピュータ詳しいんですね。」

小林は話しかけた。町田は得意そうに

「今回CADは初めてですが、きっと簡単ですよ」

と目をギョロットして、自信を覗かせた。その話を聞いていた梨絵が

「小林さん、町田さん、よろしくお願ひします。私何も分かりませんので。」

と細い声ながら、はっきりと発音した。そこに酒が入った守山がお猪口を持ってふらふらとやってきた。

「おい！」

ヤンキー座りした守山が手に持ったお猪口を左右に振ったが、小林らは何を意味しているのかわからなかった。

「勺をせんかい！」

新入社員全員に言っているのだろうが、年下の町田の方を睨んでいた。皆がどうしているかわからないという顔をしていると、

「先輩に、勺をして来いよ。」

また、町田を見ながら、赤い顔で言った。

小林があわてて徳利を持って、守山に近づくと、守山はびっくりして、ヤンキー座りのバランスが崩れ、後ろに転倒した。お猪口の中の酒がほとんどこぼれた。

「わしは、どうでもええわ、他のところへ早よ行け！」

体をねじって起き上がり、ズボンにこぼれた酒を払いながらトイレへ行ってしまった。その後新入社員五名は、徳利を持って先輩社員にあいさつ周りをした。

「田村部長どうぞ。」

小林は酒を勧めたが、元々こういう習慣が好きではない小林は、自分では楽しめず、あまり余計なことは言わなかった。

「小林・・・くんは」

と年下の田村部長は、「小林」と「君」の間に間合いを空けて話した。

「なんで、コンピュータをする気になったん。商社にいたんでしょ。」

ここは一気に言った。

「ええ社長にもお話したんですが、僕はどうしてもプログラムがしたくて入りました。今は大きな産業ではありませんが、これからキット大きくなると思っています。」

「ふーん」

道夫は気のない返事をした。

「それはそうと、小林君、君は独身か？」

履歴書を見て知っているはずだ、と思いながら。「小林」と「君」の間のスピードが、さっきより詰まったと感じた。

「はい。」

と短く答えた。小林はできるだけこの息苦しい状況から脱出したかった。

「早いこと結婚した方がええんちゃう。社会的な信用もつくし、僕なんか君より年は下やけど、もう子供もおるで。」

要するに、自分は年下だけど役職も上、結婚もして社会的信用があるので、これから、



小林君と呼ばせてもらおうよ、と言うことを遠回りに言っているのだということが分かった。  
「覚悟の前よ。どうでも呼んでくれ。」

そう思いながら、トイレに行く振りをして、その場を離れた。その後、小林は他の課長、主任クラスの人に酒をついだが、ほとんど向こうからの反応はなく、結局歓迎会の間中、田村部長以外は、誰も自分の名前を呼ぶものがなかった。

あくる日よりトレーニングが始まった。小林、町田、梨絵の三人はトレーナーの沖本君江と向かいあった。

「残念ながらこの会社には、一人一台のパソコンがありません。二台を皆で交代交代で使ってもらいますが、コーディングやデバッグはできるだけ紙でチェックしてください。」

小林はまだ何も教えてもらってないのにコーディングはないだろう、と思いながら、さあよいよ、三年前専門学校に通う決心をしてから描き続けてきた、プログラマーという職業がスタートしたのだ、という緊張感に包まれ顔が赤くなっていた。

「最初にみんなに言うておきますが、私は先輩トレーナーとして、この一週間、皆を教えます。みんなわたしより年上ですが、遠慮なくびしびしとやりますのでそのつもりで。」  
そういつてすずしげに笑った。

「小林さん」

「はいっ」

いきなり自分が最初に呼ばれたので何事かと声が少し緊張した。

「CADは触ったことありますか？」

「いいえ初めてです。」

「他の人は？」

梨絵と町田が首を横に振ったが、町田が続けた。

「とくに、CADという訳ではないですけど、グラフィックのようなものは、学校で触ってました。」

「まあ、皆初めてということで説明しますが、ここでは三年前アメリカで開発された、AI CADを使っています。AI CADは線や形を描くだけのソフトですから、機械や電気、建築といった分野で使うためには、それ用にアプリケーションを作る必要があります。この会社の仕事は、そのアプリケーションを作る仕事です。」

町田がつかさず質問した。

「言語は何を使うんですか？」

「言語は今のところLISP（リスプ）です。」

「えっ、あの人工知能用の言語ですか？ C言語は使わないんですか？」

町田は、遠回りに自分が物知りであるということを皆にアピールした。

「AI CADのプログラムは、C言語とアセンブラで書かれています、アプリケーション用言語は今言ったLISPだけです。ただ、AIスクリプトと言って、タブレット用の簡易スクリプトは別にあります。」

小林と梨絵は、だんだん専門的になる話に頑張つて食いついていこうと、メモをとっていた。わからないところを後で調べたり、誰かに聞いたりするためである。その間も、町

田が専門的な質問をどんどんしたが、君江も負けずと応答した。自分が20才の時はどうだったか、ということを考えてとき、小林は君江をすごいと思いはじめた。君江は、たいした表情も変えずに、淡々と町田の質問に応答していたが、一息ついて言った。

「今大事なことは、開発言語を云々ではなく、オペレーション（操作）をしっかり覚えることです。オペレーションがすべての基本です。まず、みんなにマニュアルを渡しますのので、この一週間はマニュアルを見て、自分でオペレーションをして覚えてください。マニュアルは二冊しかないのので、必要に応じてコピーしてください。私はデモで外に出るとき以外は、だいたい社内にありますので、質問はいつでもしてください。」

そう言って、皆の前に分厚いマニュアルを差し出した。すべて英語で書かれていた。町田がぺらぺらとめくって、

「英語ですか。」

とため息をついた。

それから小林は、二冊しかないマニュアルをコピー機で、まず自分用に取りすることにした。当時コピー一枚十円というのが、コピー代の相場で、会社でコピーするにも、かなり遠慮をして取る必要があり、小林は、先輩が部屋にいない時を見計らって、急いで数枚コピーを取った。小林は、貿易商社にいたこともあり、英文を読むのには抵抗はなかった。

町田は、しばらくマニュアルを眺めていたが、

「こんなん読むより実際にやった方が早い」

と、ほとんど朝から、二台しかないパソコンの一台を占領してしまった。もう一台は、業務で使う必要があるため、空けておく必要があった。町田は

「小林さんが使うときはいつでも言ってください。」

と言ったが、一旦コンピュータの前に座ると、形相が変わってしまい、カラオケでマイクを持って離さない酔っ払いと似ていた。仕方なく、小林は早朝や昼食時、夕方を狙ってオペレーションを試みた。ふと梨絵のことが気になった。

「田村さんは、コンピュータ使わないで大丈夫ですか？言いくかかったら、僕が町田さんに言って、席を空けてもらいましょうか？」

「いえ、大丈夫です。私は、家でも持ってますから。」

そう言ったが、小林は一日中机の前でマニュアルを読んでいる梨絵が、気になってしかたなかった。

トレーニング期間の間、課長の守山は、ほとんど出張で、時々社に戻って顔を見せるが、一言もしゃべらないまま出て行く。君江も、急に予定外の仕事が入ったのか、ほとんど朝出て行って、夕方帰ってくるという状態で、あまり面倒が見れなくなっていた。先輩の秋田は、一日中机の前に座っていることが多かったが、よく机に向かってぶつぶつ言い、時々町田が質問しても、とんちんかんな答えが返ってくるので、そのうち誰も相手にしなくなってしまった。

一週間が過ぎた月曜日の夕方、小林は社長室に呼ばれた。

そこには社長が一人でいた。小林が挨拶をして椅子に腰掛けると、社長がおもむろに言った。

「どうですか、慣れましたか。」

「はい。まだ、トレーニングは続いています、仕事の内容は、だんだんわかってきました。」

社長は一呼吸置いて、手を組んでから切り出した。

「実は守山さんが、小林さんはどうも技術職には向いていないようだ、と言っているのですが。自分ではどう思いますか？」

小林は一瞬電気が走るような衝撃を覚えた。あまりにも唐突で心の準備がなかったため、何か言わないといけないと思いつつ、頭の中で一生懸命言いたいことを整理しようと試みた。

「守山さんとは、ほとんどコンタクトがないんですが。なんで、そんなことをおっしゃるのか解りません。」

そう言ったが、どうして彼がそんなことを言ったのかは勿論想像がついている。「守山さんは僕が年上で煙たいだけなんです」とは彼の信条からは決してして言えなかった。そして社長は、そのことをきくと分かっていて、自分に聞いたのだと思った。

一年前を思い出した。貿易会社を休んで、密かにこの会社の面接を受けた時にも、直接社長に訴えた。

「.....わたしは年は取っていますが、今まで無駄な人生を送っていた訳ではありません。英語でも、ヒンディー語（インドの言語）でも食っていきます。ただ、どうしてもプログラミングがしたい。この気持ちをなによりも大事にしています。もし三ヶ月経って、役にたたないと思ったら、首にさせていただいて結構ですし、給料もお返しします。」

田村社長は、小林の情熱的な訴えに小さくうなづきながらやさしく話した。

「いや小林さんの熱意には感服します。ただ、うちは若い会社で、プログラミングができるのは、たくさんいますが、営業の方は弱い。この経歴を見ていると、うちの営業に是非ほしい人材です。例えば技術もするが、営業の方も助けてもらう訳にはいかないですかね。」小林は、自分を高く買ってくれてありがたい、という意味でうなづいて聞いていたが、自分が話す番になって手をギュッと握りしめた。

「社長、私は中途半端なことをしたくないのです。技術と営業と両方になると、たぶん社長は理解されてても、周りの人が私を営業として使おうとするのではないかと、思います。年もいってるし、他の人と比べて社会経験もありますので、結局、煽てられて便利に使われて、そのうち100%営業職になってしまうのを心配しています。今まで営業をした経験からいいますと、営業は簡単に見えて兼任できるような簡単な職務ではないと思います。正直、今はプログラミング以外の仕事以外には、つきたくないと思っています。私は、プログラミングをするために、今の会社をやめようとしているのです。そのことだけ約束していただければ一所懸命、献身的に働きます。」

悪く取れば、脅迫ともとれる大胆なことを言った。また、決意の目で社長を見据えた。小林自身、田村社長は人物だ、という好印象を持ったが、プログラマーになれなければ無意味であり、ここがだめなら他を探す、という気持ちでいた。田村社長は静かに話した。

「わかりました。検討しましょう。ただ一つだけ聞かせてほしいのですが、どうして商社マンをやめてプログラマーになろうと思ったんですか？」

小林は得たり、という顔をして、今まで家族や友達に語ってきたことを話した。

「商社マンは、見た目はカッコいいですが、結局ものを販売することが目的で、自分でなにかクリエイイトする訳ではありません。外国に出張したときに、よく分かるのですが、私はいつも、メーカーから来るエンジニアの通訳さん、という役割です。日本では英語ができるだけでちやほやされますが、外国に出ると、そんなものは当たり前で、大事なのは、外国の人たちがほしがる技術をその人が持っているかということです。わたしは、文系の大学を出たので、いきなりエンジニアリングに入る訳にはいきませんが、コンピュータなら始まったところなので、理系も文系もまだありません。同じスタートです。」

「あと給与のことですが、商社のような高い給料は出せませんがいいですか？」

「はい、それは覚悟しています。今までの蓄えがありますから、自分の技術が向上して、それで飯を食えるまで食いつなぎます。」

その後、しばらく返事がなかったのも、入社試験に落ちただろう、と思っていた矢先、小林は会社から合格通知をもらった。そして商社に退職願を出し3ヶ月を経て退職した。

小林は、表情を明るくしようとしたが、社長が何か変なこと、例えば、営業に転属すると言いださないかと心配し、指すような目で社長を見ていた。社長はしばらく考えていたが、

「どうも、守山さんとなにか問題があるようだね。これは、当人同士で解決できればいいが、できなければ、こちらでなにか手を打たないと、会社そのものが立ち止らなくなる可能性があるからね。」

小林は、たった一週間で、こんな窮地に追い込まれるとは、それも技術的なものならいざ知らず、こんなつまらないことで、進退問題になるとは想像もしていなかった。とにもかくにも、守山と喧嘩にでもなれば、会社はどんな理由であれ、戦力になる守山をとるであろう。今は、あまりにも立場が弱い。小林は決心した。

「社長、お手を煩わしてすみません。私が守山課長とよく話し合っ解決しますので、すみませんがお時間をください。」

そう言ったものの、実際はなんの解決策も持っていなかった。

小林はこの一週間、毎日朝6時に家を出て、夜の12時ころに帰っている。寝る時間は三～四時間だ。家は、大阪北の郊外茨木市にあり、会社まで約一時間かかる。父親が五年前に亡くなり、その遺産を頭金にして三0坪ほどの土地を買い、二年前に家を建てた。一っ子だったため、現在70才になる母親と二人暮らしをしている。

「ただいま。」

夜の12時なので、母親は大抵寝てしまっているが、それでも用心のために声をかけるようにしている。返事がないので、寝てしまっているのだろう。

二階建ての一階が、台所と15畳ある居間と、風呂トイレ、二階が寝室で三部屋ある。風呂は、夜に入るとそのまま寝てしまう可能性があるのも、いつも朝入りにしている。そのため、朝は五時ころ起きている。食事は会社で取ってきているので、自分の部屋のベッドにもぐり込んだ。

郊外とはいえ、まだ田んぼが近くにあり、蛙の声や虫の声がしている。小林は目を瞑っ

たが、寝られなかった。

守山は小林より5才年下で、たまたま人材がいなかったために、新しいCAD技術部の課長になったに過ぎない。技術の程は分からないが、人物からいうと最低の人物で、到底、人の上に立てるような者ではない。こんな人物に自分から擦り寄って、ご機嫌伺いをするなど到底プライドが許さなかった。

「だがどうしよう？」

彼が以前勤めていた商社は小規模の貿易専門商社であったが、この種の人間はいなかった。世の中には色んな人がいる、ということであらためて思い知らされた。自分が描いていた構図が、早くも崩れるのではないか、という恐怖で、その夜はほとんど眠れなかった。

次の日、入社してから二週目の火曜日になった。

話では、トレーニングは一週間ということで、それでいくと、先週の金曜日に終わっているはずであるが、守山がほとんど顔を見せず、なんの指示も出さないため、そのままトレーニングを続けていた。

急に営業課長の崎田が顔を出した。スポーツ刈りで浅黒く、目がいつもギラギラしている崎田は、いかにも強引な営業マンという雰囲気を持っていた。

「あの君ら、守山君しらん？」

さっきから、守山を探している様子であった。そこにタイミングよく守山が現れた。

「おい、すまんけどな、急にお客さんが来て、CADがどんなもんか見たい言ってるの。お願いね。」

守山は煙たい顔をしたが、ただ、自分より年上の営業課長には一目おいているようであった。

「君江が出張してるんで、明日になりませんか？」

「おい、客はいつ来るのか分からんねんで。そこに新人がおるやないか。もう10日も経ってんねんからできるやろ。」

町田が目をギョロットさせて言った。

「わたしでよければ。」

守山は

「やめとけ」

というように、目配せで合図を送ったが、町田には分からなかった。

応接室に崎田が戻った間に、守山は町田を小声で叱った。舌打ちをして、

「デモは君江に任してあるんや、町田、客から言われたことで、わからんことあっても俺に振るなよ。」

すぐに崎田が大阪機械のエンジニア二人を連れて戻ってきた。崎田が大げさに紹介した。「わが社の誇るCADグループです。いまからアメリカのAI CADのデモをお見せします。」

町田がコンピュータの前に座り、右と左斜め横に椅子を一つずつ用意して客を座らせ、社員はそれを取り囲むように立った。町田は普段からコンピュータの前に座りつづけているので慣れた動きをした。

「線は、このようにタブレットのペンを動かして描きます、次に、四角、円もこのように

描けます。」

町田の手馴れた動きで、守山も少し安心した。

「質問してよろしい？」

と客がたずねた。崎田が愛想笑いを浮かべながら

「なんでも質問してやってください。」

「僕らは機械設計なんで、設計図を手書きしてるんですけど、この機械を使ったら、速く描けるようになるんですかね。」

町田が答えた

「まあ、機械のいいのを買えば、速くなると思います。また訓練も必要ですけど。」

と咄嗟に、後ろで小林が口を挟んだ

「お客様は設計のプロですから、描くスピードが速くなるということで、会社にCAD購入の稟議書を出されますと、たぶん後で問題になると思います。正直言って、最初は手書きの方が速く描けるのではないかと思います。その理由は、まだCADの技術は始まったところで、手書きと同じように線を描く能力しかないからです。これから協力させていただいて、機械用のアプリケーションを作れば、例えば寸法線というコマンドで寸法線が一気に引けることになります。また部品のシンボルを少しづつ作って登録していけば、二回目からは部品名を選択するだけで部品が描けるようになります。そうやって初めて、どんなプロの手書きより早いということになります。」

崎田がびっくりして、小林を見た。

「ええと、この方のお名前はなんやったっけ。」

ひそひそ声で守山に聞いた。

「小林」

守山は小声で崎田に答えた。崎田はにやにや笑い、

「うちの小林さん、いや、小林が説明したことが、分かっていただけかもしれませんか？」

と客に聞いた。小林はタイミングを計らい、話をつづけた。

「すみません。もうひとつ、稟議書に書いていただきたいことですが。コンピュータの能力を入力、出力、編集という三つの能力に分けて言いますと、入力、先ほどの手書きスピードの話のように、機械を使ったからといって、人間のスピードより速くなるかどうかわかりません。ただ、一旦入力したものを編集したり、出力したりするのは、コンピュータが最も得意とするところです。例えば、図面を少し修正するのも、手書きであれば、ほとんどの線を消して作業することが多く、もう一度、一から描き直したほうが早いくらい時間がかかる作業ですが、CADでしたら、全体を消さずに、部分修正することが可能です。最後に、出力に関してですが、手書きのものでコピーを取ろうとすると、青焼きコピーを取って、すごく時間がかかるのと、もう一つオリジナルの精度から必ず劣化します。その点、CADとプロッタを組み合わせると、何枚でもオリジナルクオリティーのものが取れます。さらに、手書きですと、保存場所をとり、図面も紙とインクでは、年々劣化しますが、CADだとフロッピー一枚に何枚も図面が保存でき、バックアップを定期的に取りければ、未来永劫劣化しません。」

小林は、出すぎたことですが、というように少し遠慮した口調で、しかし、一つ一つの言葉を客に理解させるよう、振り向いて話を聞いてくれている客の反応を確かめながら説

明した。客と小林本人以外の全員は、突然のことに驚いて、小林の顔を不思議そうに眺めた。二人の客は、これでうまく本社を説得できる、という自信が出たのか、にこにこして言った。

「いや、よくわかりました。崎田さん、取り合えず、二台分のお見積もり、お願いしまっせ。それから、機械用に早いことアプリケーションを作らなあかんやろから、小林さんか誰か、協力してもらおうこともできまっしゃるか。」

崎田は上機嫌で

「もちろん、うちのトップエンジニアの小林をおつけしますから、よろしくお願ひします。」

そう言って、崎田は客をエレベータまで送りに行った。その間町田が梨絵にささやいた「新入社員をトップエンジニアってよう言うわ。」

梨絵は別に否定せず

「でも、小林さんも、町田さんもすごいですね。」

とつぶやいた。

崎田は客を見送って、CADルームに急いで戻ってきた。

「守山君、大阪機械さんは大事なお客様さんやから、しばらく開発のために、工場に通ってもらわなあかん。小林さんはどうです、行けますか。」

なぜか、小林を「さん」付けて呼んだ。小林もうれしくなり。

「守山課長がOKであれば、是非させていただきたい仕事です。」

守山は、どうしてもせえよ、というふてくされた態度を取ったが、崎田は気が短いのか、たたみこむように言った。

「よっしゃ、決定や。必ずこの仕事は取るからな、守山君頼むで。小林さんこれからも頑張ってや。」

## 第二話 小林、発進

この件があつてから、小林は精神的にずいぶんと楽になった。営業課長の崎田が、あちこちに触れ回って、小林さん、小林さんと煽ててくれるので、田村部長以外は小林を迷わず「さん」付けで呼ぶようになった。

小林はしばらく崎田を見ていて、名前の呼び方に崎田なりの法則があることが分かった。例えば、年下の社員は、田村部長以外すべて、「君」付けか呼び捨てで、田村部長に対しては、さすがに「君」付けでは呼ばないが、「さん」付けでも呼ばない。本人のいない所では、「田村」と呼び捨てにして、本人のいる時は、名前を呼ばず、あなたとかそちらとかと、代名詞で会話する。年上でも、部下の三五才の部員には、ためらいもなく、「君」付けで呼んでいる。その他、一才年上の東野汎用プログラム課長に対しても、本人のいないところでは、接頭詞に「あほの」とか「ぼけの」を付けて呼んでいる。

小林は、自分を盛り立ててくれる崎田に感謝する反面、少しでもミスをしたり、頼まれたことができなかつたりしたら、自分も同じように、「あほの小林」と呼ばれるのだろうと思ひ、そういう意味で、以前とは違った緊張を感じていた。

デモの次の日から、崎田から頻繁に声がかかるようになり、ほとんど毎日のように、大阪機械へ出かけるようになった。守山には、報告書という形で毎日書いて、彼の机の上に置いた。小林の仕事は、すこしづつ充実してきたが、昼間忙しくなった分だけ、機械を前にする時間が短くなったので、早朝、深夜、土曜、日曜の練習が続いた。そのうち、崎田が所構わずデモの予約を取ってくるので、無茶苦茶に忙しくなり、体力的にも限界に近くなったが、小林はこの忙しさは幸せだと感謝していた。

そしてあつという間に三ヶ月が過ぎた。

以前、面接時に小林が田村社長に宣言した

「三ヶ月経って、ものにならなければ、会社を辞める云々。」

という、三ヶ月という期限は、小林が適当に考えた訳ではなく、20才のとき、英会話を三ヶ月で学習した経験から来ていた。その後、何か新しいことをする度に、三ヶ月という期限を自分に課してきた。そして、彼の中には、人の細胞が三ヶ月単位で代謝するように、人間必死になれば三ヶ月で皮剥ける、という信仰ができていた。梅雨もあけ、7月も終わろうとする夏のある日、小林は、自分から社長に面会を求めた。

小林が社長室に入ると、そこには社長と、妻で専務の幸子がいた。二人とも、先に何かおもしろい話題を話していたのか、笑顔が残っていた。小林が挨拶をして椅子に腰掛けた。幸子が微笑みながら切り出した。

「頑張っておられるようですね。朝早くから夜遅くまで。」

小林は、話がこれからどう展開するのか心配したが、首にする相手に笑顔で迎えることはないだろうと思って、少し安心した。

「はい。実際に始めてみると、色々やらないといけないことが多くて、夜遅くなって、皆さんにはご迷惑をお掛けしていますが。」



次に社長が話した

「最近、大阪機械さんに行かれていますよね。」

「はい。」

「実は、この間大阪機械の社長さんと会ったときに、うちからいいベテラン技術者を付けてくれた、とあって感謝されました。はじめは、誰のこと言っているのか解らなかったんですが、崎田さんに聞くと、小林さんのことだ、というじゃないですか。いや驚きました。」

小林は

「ベテランですか、はあっ」

緊張感がとれて、溜まっていたガス抜けたような声を出した。幸子が続けた。

「今日は、どのようなことでいらしたんですか？」

「はい、入って早々に、社長から、守山課長とコミュニケーションがうまくいっていないのでは、と問題提起がありまして、自分で解決するように、と言われました。守山課長に、できるだけコミュニケーションを取ろうと思っているのですが、最近外に出ることが多くて、守山課長も忙しくて、ただ、その日のあったことを書いた報告書は毎日出しています。最近になってですが、朝出勤時に、守山課長に挨拶すると、三回に一回は返事してくれます。」

社長と専務は、冗談でも聞いたようにお腹を揺らして笑った。社長が笑いながら

「なるほど、苦勞されている訳ですね。いや小林さんの努力はよく解りました。確かに、守山さんはいい技術者ですが、難しいところもあります。申し訳ないですが、小林さんの方で 大目に見てやってください。」

小林は、この言葉で今までの苦勞が報われたように感じて、体が熱くなった。

すぐに返事の言葉が出なかった。専務が気遣って続けた。

「この調子で頑張ってください。必要なマニュアルのコピーも、遠慮せずにどんどん取ってください。」

「はい。」

面談から帰って来ると、夕方の7時になっていた。部屋には、たまたま梨絵だけがいた。梨絵は、いつも自分からあまりしゃべることはないのだが、このときは、なにか落ち着いた様子で小林に話かけた。

「どうでした。社長とお会いになったんでしょ。」

「はい。いろいろ励まされました。」

と言ったときに、はっと気付いたことがあった。面談で、専務が最後に言った、

「マニュアルのコピーを遠慮せずに・・・」

というのはたぶん娘の梨絵が告げ口したに違いない。梨絵は、大変な努力家で、口数も少なく、普段から社長家族の一員であるという素振りは見せないし、逆にそういわれるのを嫌っている素振りがある。でも、家族で夕食時などにいろいろ話している間に、そんな話題がでるのであろう。

「まあいいか。ここは素直に感謝しよう。」

そう思い直して、梨絵ににっこりと微笑んだ。

「ご心配をお掛けして、でも、だいぶ慣れてきてエンジンもかかってきました。」

少しして、客先にデモに行っていた沖田君江と町田が帰って来た。いつもは夜食に弁当を買ったり、近くの中華料理屋で出前を取ったりしていたが、久しぶりに四人で外に食べに行こうという話になった。

ちょっと歩くつもりが、心齋橋まで歩いてしまった。そこで、どうせなら道頓堀まで行こうということになって心齋橋筋を南に歩いて行った。普段仕事に忙殺されている四人にとって、久しぶりのネオン街であった。赤い灯青い灯と唄われる道頓堀の灯が、四人を照らした。

小林は、かつて商社にいて、外国から客が来る度に、この界限を連れて歩いたのだが、今日の道頓堀は格別であった。みんな、体は疲れていたが、お互いに励まし合って来た仲間と、初めて遠足に来たような気分になっていた。みんなお金がないので、安くて豪華に見える食事、という贅沢なことを言って、店を一軒一軒チェックした。

町田は食事にもおたくで、訪れる店の特徴をどこで調べたのか、よく知っており、このうなぎは養殖でおいしくないとか、このラーメン屋は、麵にかん水を使いすぎているとか、スープに化学調味料が入っているなど、と店の前で皆に説明しては

「さあ次、行きましょ。」

と言って、なかなか決まらなかった。このままでは食事に見つけられない、と思った小林は

「レディースチョイスで、いきますか？」

君江と梨絵に振ったが、君江も梨絵もネオンをながめて、うっとりしていて、何も考えていそうになかった。

「じゃあ、僕が昔行った店で。」

そう言って、近くの中華料理屋に案内した。屋号は「梁山泊」。高級中華料理店とラーメン屋の中間に位置するような店構えで、白いテーブルクロスがかかっていた。ここでも町田が何か言いたそうであったが、演説しようとする町田の背中を小林が無理やり押しして中に入った。取り敢えず、生ビールを注文した。

「乾杯！お疲れさん！」

四人の顔がキラキラと輝いた。

「ここに、しょっちゅう来るんですか？」

君江が小林にたずねた

「昔は、会社の仲間とよく来たけど、一年以上来ていません。」

「小林さんって、商社にいたんでしょう？」

君江が遠慮なしに、たずねた。

「ええ、この界限に事務所があります。」

「どんなこと、してたんですか？ねえ興味あるよねえ」

と君江は梨絵に同意を求めた。

「ええ。」

梨絵がうつむきかげんに笑った。

「どう言っているのか、一言で言えませんが、インドと貿易をしていました。」

「えっ、インドですか？」

と町田が驚いた顔をした。

「実は、私もインドに行ったことがあるんですが、まあいろんな意味で、すごい国ですね。へえ、インドの専門家だったんですか？」

町田がオーバーに驚いた。小林は普段自分のことは言わなかったが、今日は、飲めない酒を飲んだ勢いと、開放感で口が軽くなっていた。

「実は、学生の時は、インド人の先生について、ヒンディー語を勉強してました。それで、ニューデリーにある大学に一年間留学しました。」

「ほんならあれですか、インド語がしゃべれるんですか？」

「ええ、それで飯を食おうと思っていました。」

「それがなんで、コンピュータになったんですか？」

今度は、君江が興味を示した。

「いや、いろいろありまして、留学から帰ってきたらお世話になったインドの先生が、学校を首になったりしてまして、それで学校と裁判沙汰になって、まあまあいろいろあった訳です。」

小林は、この辺りで自分から話題をそらそうと考えた。

「町田さんは、すごく物知りですが、コンピュータは、昔から興味があったんですか？」

町田は、かなり目がとろんとして来たが、箸を両手にもってドラムをたたき格好をした。

「わたしは、元々ミュージシャンですよ。ドラムを叩いてました。アマチュアでは有名なバンドでしたがそれでは飯が食えないんで、コンピュータでもやってアルバイトしようと思って始めたんですよ。その趣味が高じて、今こんなことやっていますが。」

君江が口を挟んだ

「守山さんも昔、ベース弾いてたってしてます？」

三人は「へー」という格好を見せたが、守山によい印象を持っていなかったのも、誰もその話に乗ろうとしなかった。君江は、なぜか積極的に守山の話題を展開した。

「みんな、誤解されてるかも知れませんが、守山さんはあれでいい人なんでよ。」

町田が

「へえっ」

とオーバーに驚いた。

「僕にはまだましやけど、小林さんには、いつもきつう当たってるやないですか？ねえ小林さん。」

振られた小林は、とりあえず君江の話がききたくなった。

「僕は、守山さんが僕に特につらくあたるのは、僕が年上やから、使いにくいからやないかな、と思ってるけど。」

酔いにまかせた振りをして、本音を出した。

「それもありますけど、小林さんの経歴が素晴らしくて、きっと焼きもちをやいてるんだと思います。あの守山さんて、両親が離婚されて、お母さんと二人で暮らされてるんです。家が貧しくてミュージシャンの道をあきらめたんで、きっと、お金持ちでエリートの人につらくあたるんだと思います。皆が入ってくる前に、小林さんの履歴書みながら、「俺はこ

んなやつが一番嫌いや」と言ってましたから。」

そう言ってから、言い過ぎたと思ったのか

「守山さんに言わないでね。」

とあわてて言った。

「なにか、誤解があるようだけど、実は僕の家庭こそ、貧乏のどん底だったんですよ。僕が生まれたとき、父は50才で、母は40才。おまけに一人子で、僕が小学校に行く前に親父は退職して、それから家で誰も働き手がなかった。親父は僕が高校生のときは病気がちで、入退院を繰り返して、僕はアルバイトで食いつないだんです。成績がよかったのは小学校の時だけで、その時はオール5やったんです。中学一年生の時に、肝炎にかかって入院してから、なんか学校が嫌いになって、成績はがた落ち、高校の成績なんて欠点ぎりぎり、英語の時間なんか、僕が本を読むだけで、皆に大笑いされたんですよ。」

君江が、

「でも、英語が話せるんでしょ。どこで勉強されたんですか？」

「話が長くなりますけど、かいつまんで言いますと、受けた大学すべて落ちとされてから、これではいかんと思い直して、そこら中の外人捕まえて英会話の練習をしたんです。ほんまその時の自分を誰かが見てたら、ちょっと頭がおかしいお兄ちゃんにみえたでしょうね。必死だったんですよ。大学を落とされて初めて自分の実力がわかったというか。それまで小学校のオール5の夢が、ずっと背後霊で憑いてたというか。中学、高校であれだけ成績が悪かったんですけど、自分は天才だと、ずっと本気で思ってたんですね。あほですね。」

「できたら、もっと聞かせてもらえますか？」

と君江が目を輝かせて言った。梨絵も小さくうなずいた。

「浪人したけど、元々人に教えてもらうのが嫌いなんですね。予備校に行くのがいやで、またそんなお金もなくて、自分で図書館通いをしたんです。自分で一年間の計画を立てて、朝から晩まで図書館で勉強しました。それで次の年、自信をもって大学を受け直したんですけど、これも、一つの私立大学以外はみんな落とされて、結局行ったのが浪速外国語大学の英語学科です。とてとてもショックでした。浪速外国語大学は、いわゆる有名大学ではなくて極端に言えば、誰でも入れる大学だったんで、なんか、自分の中にそういう気持ちがある以上、クラスの皆とも馴染めませんでした。ただ、自分で勉強するという習慣が一年間の図書館通いでついたんですね。他の人のように遊びたくなかった。何か、人と違うことがしたかったんです。そこで偶然、学校でインド人の先生と知り合いました。インド語という科目はなかったんですが、僕が、「是非勉強したい」と言ったら気持ちよく、ただで教えてくれたんです。覚えてたの下手な英会話を駆使して、今度はヒンディー語に挑戦しました。つまり、高校時代は一番語学が不得意だったので、今度は逆に得意になってみようと思ったんですね。」

君江が大げさに

「でも、今の話ってすごいですね。こんな考えをする人が日本にいるなんて知りませんでした。」

小林が、まだ終わってないという感じで続けた。

「普通は、高校生まで一所懸命勉強して、大学になったら遊ぶ、というのが世間一般人の

やることやけど、僕は全く逆で、20才過ぎてから勉強し出したんですよ。そやから今でも勉強が嫌いになってないんちゃうかな。」

君江と梨絵は、目を輝かせて小林の身の上話をきいていたが、町田はだんだん眠たくなってきたようであった。

小林は、調子にのってしゃべり過ぎたと反省しながら、話を君江のほうに向けた。普段から君江に聞きたいことがあって、このチャンスに聞くことにした。

「沖田さんは、まだ若いのに、すごくしっかりされてて、実は、私が20才の時はどうだったか、と考えたときに、恥ずかしいくらいです。失礼ですけど、君江さんにも、なにか人生に大きな転機があったんですか？」

君江も酔っ払っていた。普段、人には決して明かしたことのない過去を語り始めた。

「わたしは、中学校の時はクラスでいつもトップクラスで、地元の北海道の公立高校一本に絞って受験したのね。最後の社会のテスト終了のチャイムがなって、ホッと安心して、後ろの席にいた友達を振り返って「どうだった？むつかしかった？」とかしゃべってたら、いきなり試験官がやって来て、私の回答を取り上げて、別室に連れて行ったの。それでカンニングだっていうのよ。「そんなことはない」といくら言っても信じてもらえないで、結局、失格になったのね。」

君江が急に爆弾発言したので、みんなシーンとしてしまった。

「うしろの友達はどうなったの。」

気を使って、珍しく梨絵が質問した。

「それが、私が振り向いてきたから仕方なく相手したけど、自分は被害者だって言ったのよ。あとで担任の先生にも相談したんだけど、一旦決まったことを覆すのは難しいだろう、と言われて、結局昼間の高校は行けなくなった。先生の薦めで夜間高校を受験したけど、なんだか楽しくなくて、やる気がでなくて、結局定時性高校も途中で行かなくなって、家でぶらぶらしてたの。」

梨絵が同情して、

「次の年に受けなおした？」

「なんか一旦やる気なくなったら、何もかもうまくいなくなるような気がして、それに自分のライバル達が、一つ上の学年にいるなんて絶えられないじゃない。人間ってちょっとしたことでよくなったり、落ちぶれたりするってことが解ったわ。親とも大喧嘩して家を飛び出したの。それからはあんまり話したくないわ。」

酔って俯いたまましゃべっていた君江は、はたと顔を上げて、少し焦点がずれた目でじっと梨絵の方をみつめた。

「あんた、今のこと秘密よ。社長や専務に言ったらだめよ。」

梨絵は、自分が普段から会社のスパイのように思われている、と感じていたので、酔いも手伝い、普段の梨絵では決して見せたことのない怒りの表情を見せた。

「私普段からいろいろ誤解されているようですから、あまり言いたくなかったけど、この際はっきり言います。」

かなり決心したように一旦、目を瞑って姿勢を正してしゃべり出した。

「私が、なぜ自分の両親の会社に勤め出したかという、実は父が会社の経営で疲れて、家で一度倒れたことがあるんです。その時私が偶然そばにいたから助かったけど、そのままにしていたら死んでいたところって、医者から言われました。今度倒れたら命はないわ。母だって仕事で忙しいし、兄はあんな性分で、飛び回ってるでしょ。結局私が注意してあげるしかないのよ。もちろんそれだけじゃなくて、CADを勉強したいというのも本当の気持ちです。」

梨絵は、誤解されて悔しいという表情で涙を浮かべていた。突然眠りから覚めた町田が梨絵に同情した。

「小林さん知ってます。梨絵さんは、K大を出たんですよ。K大といやあ、あんた関西一やおまへんか。ノーベル賞も沢山取ってるし、普通K大を出てこんな会社に入りますか？」

小林がテーブルの下で、町田の足を踏んで、失言だということを合図した。町田は気づいて

「失敬。いやそう意味では・・・」

あとは、フニャフニャ言って、酔っ払って失言したというようにごまかした。梨絵の方が逆に気遣って話題を変えた

「このお店の壁に、中国の豪傑の絵がありますけど、お店の名前が梁山泊っていうくらいですから、水滸伝に出て来る豪傑ですね。」

「さすがですね。」

小林が感心した。ついでに梨絵の知識を試した。

「あそこに、一人だけ剣を持った綺麗な女性がいるでしょう。あの女剣士を知っていますか？」

「一丈青・扈三娘（いちじょうせい・こさんじょう）。」

梨絵が即座に答えた。町田はさっきの失言の穴埋めもあって、オーバーに驚いて

「すごい梨絵さん。すごい、すごい、」

を連発した。結局その日は遅くなり、女性陣はタクシーで帰り、男性は終電に乗って家まで帰った。

## 第三話 新体制

8月になってから、大阪機械が会社全体でCADを使うことに決定したことから、CAD技術部は前にも増して忙しくなった。守山以外は全員、大阪機械の仕事に割り当てられ、先行で対応していた小林は、すでにリーダー格になっていた。

守山とは相変わらず、ほとんど話すことがなく報告書を書いて出すだけの、片想いのラブレターの状態が続いたが、朝挨拶をすると、ちょっと手を挙げるくらいにはなった。たぶん、君江が少しずつ小林のことを守山に話しているのだろう。小林も君江から守山の話聞いてから、前ほど修復できぬ間柄という感じでは見なくなっていた。なにかチャンスがあれば、心が通えるかも知れない。ただ、今は全員が忙しく、そんな事を考えている余裕もなかった。

12月になった。小林は相変わらず忙しい日々を送っており、役職こそついていなかったが、事実上のCAD技術部リーダーになっていた。数日後には大阪機械の技術を応用して開発した、AI MECHAという、機械向けアプリケーションの発売を控えて、てんでこ舞の忙しさであった。

小林は前の夜、深夜まで働いたため、その朝は少し遅れて来た。エレベータから下りて、会社の玄関を見ると、ドアのところに社員が数名立って、何かしゃべっている。その中に、町田の顔も見えた。出勤したら各部屋に入るのが普通なので、何か異常事態を感じた。

「やあ町田さん。」

小林は、普通にあいさつしたが、町田は小林を待ち構えていたようであった。

「おはようございます、小林さん。今日の新聞見ました？」

「いや、今日は、そんな時間がなくて、何かあったんですか？」

「この会社が、ソラリスとかいう会社を買収されたって。」

「えっ！」

全く今まで、そのような情報がなかったのだから、立ったまま固まってしまった。

「それで、社長からなんか発表があったんですか？」

「今、課長以上で会議を開いてて、まだ終わってないから皆待ってるんですよ。」

「そうだ、梨絵さんに聞いてみよう。梨絵さんどこ？」

「梨絵さんはまだ、もしかしたらお休みちゃうかな。」

「どうして?!」

とは言わなかったが、梨絵もこうゆう時に休むのは、卑怯だと思った。だが、すぐに、もしかしたら社長が梨絵に攻撃が集中するのを恐れて、わざわざ休ませたのではと思い直した。

「まあ、後少ししたら詳細がわかるから、じたばたしても仕方ない。」

そう思って、自分だけCAD技術部の部屋に入った。何だが初めて仕事が手につかなかった。考えたくないが社長が卑怯者に見えてきた。

「どんなことを発表するんだろう。」

30分発ったがまだ終わるような雰囲気はなかった。突然ドアが開いて、入ってきたの

は梨絵であった。

「おはようございます。」

消え入りそうな声であった。小林はさっきまで、梨絵が来たらしいいろいろたずねたい、と思っていたが、やつれた姿をみると、別の言葉が出てしまった。

「お父さん、大丈夫か？倒れてないか？」

「ありがとうございます。父は大丈夫です。今回のこと、今まで隠していてすみません。私も前から知っていたのですが、口止めされていて。本当に申し訳ありません。」

ドアを入ったところで、梨絵は頭を下げて、立ったまま泣いてしまった。小林は、女兄弟がいないせいか、こういう場合どう慰めるべきなのかわからなかった。まさか映画のように、肩を抱きよせる訳にもいかず、じっと見守るしかなかった。ただ、なぜ今頃梨絵がこの部屋に現れたのか、不思議に思った。

そのうち町田が部屋に入って来た。泣いている梨絵を横目で見ながら、  
「社長の発表があるから、みんな汎用技術部の部屋に集まってください。」

そう言って、別の部屋に走って行った。

「じゃあ行きますか？」

小林は梨絵を誘ったが、泣き顔を皆に見られたくないのか

「もう少しして行きますから、どうぞ先に行ってください。」

と返事した。

汎用技術部の部屋は一番広く、全員を集めるときはこの部屋を利用する。

田村社長と専務が前に立って、沈痛な面持ちでいた。全員が揃ったところで、社長と専務が皆に一礼した。社員もあわてて、卒業式のような礼をした。社長が静かに話し始めた。

「みなさん、新聞発表などですすでにご存知だと思いますが、T E S社は、近くソラリス社の傘下に入ることが決定しました。T E Sという会社名、また皆さんの仕事の内容や組織は、全く今までと同じですから安心してください。ソラリス社は、業界では大手で、ご存知のように、ゲームソフトなども作っています。弊社のC A Dシステムにとっても興味を持って、今回の合併になりました。」

町田が小声で、

「合併じゃなくて、吸収でしょ。」

と言った。

小林は、「やめとけ」というように、軽く手で町田を制した。

田村社長は、話しながら首筋が痙攣しているように、ピクピク動いていた。梨絵は、後ろの方でそれを心配そうに見ていた。

やがて、社員に関しては、事務所も変わらず、T E Sという社名も組織も同じ、ということが分かると、みんな少し安心した。さらに、大手による買収なので、これから給与も上がるのでは、という期待感を匂わせた。小林は、他の社員ほど単純に喜べなかったが、会社の買収そのものは、悪ではないと思い直し、きっと社長のことだから、社員全員が今までと同じように働けるよう、ソラリスと掛け合って尽力してくれたのだと、良いように解釈することにした。



1987年一月に正式にソラリスの傘下に入った。

同時に田村社長と専務は退任し、ソラリスから新社長が就任した。田村道夫統括部長はそのまま残り、梨絵も残った。梨絵は、父親が心配であったが、母の仕事がなくなり、父の面倒が十分見れるようになったので、残る決意をした。大手が買収しただけあり、新社長の就任式は、市内の一流ホテルの小ホールを借りて行われた。

T E S 社員、役員、親会社役員、取引先、銀行関係、地元大阪の名士が招待された。ボーイがシャンパンやカクテルを運び、着物を着たホステスが話し相手になった。小林、町田、君江、梨絵は自分たちの行き場がなくて隅の方で固まっていた。町田が、「こんな派手にするくらいやったら給料上げてくれたらええのに。」

と皮肉った。

新社長は、荒川大輔と言い、34才の若さであった。長身でダンディーで、縦縞のスーツを着て、いかにも隙のない構えをしていた。噂では、私立の一流大学W.大を卒業したエリートで、絵に描いたような出世をして来たということであった。

荒川社長はコニャックのグラスを持って、関係者に挨拶に回っていた。小林は飲み物を取るために、皆と離れて歩いていたとき、荒川に呼び止められた。

「君は確か、小林君だね。」

丁寧だが、尊大な態度だった。昨日、会社で全員を集めて社長の挨拶があったので、小林が社長を見るのは二度目であった。

「君の活躍は、あちこちから聞いているよ。元々商社にいたんだって？」

「ええ、商社でも小さいほうの小社ですが。」

軽い冗談を言ったが、荒川は笑わず、即座に別の質問をした。

「小林君、君はどここの大学出かね。」

「はい、浪速外国語大学でインドの言葉を勉強しました。」

荒川はきょとんとした。

「浪速外語といえば、国立かね？」

「いえ私立ですが。」

「あそう。」

それ切り、興味を失せたような顔になり、近くに歩いて来た知り合いを見つけて、さっさと行ってしまった。小林は、いつも初めて会った人に語るように、自分のコンピュータに対する情熱を語ろうと思っていたが、出鼻をくじかれた。ようするに、荒川社長の興味は、コンピュータの経験ではなく、どこの大学出身かということらしかった。

翌日、荒川は社長室に田村道夫部長と、なぜか梨絵も呼んで、三人で今後のことを話し合っていた。荒川は朝から機嫌が悪かった。

「昨日、パーティーでうちの社員に会ったけど、ろくに挨拶も出来ん奴がたくさんいた。おかしいと持って、今朝社員のプロフィールを調べたら君ら兄弟以外、ろくな学校を出とらん。」

タバコを燻らせて

「田村くんは、僕と同じW.大で、妹さんはK大出身だから立派なもんだが。いや、君たち

二人はいいんだよ。でも、あとは皆クズじゃないか。」

そう吐き捨てるように言った。二人は、怒っている社長にどう対応してよいのか迷った。「この会社を買収する前に、君らのお父さんはどう言ってたか、知ってるか。優秀なエンジニアが揃った、専門家集団だと言ってたんだよ。どうやら君のお父さんに騙されたみたいだね。」

梨絵はさっきから荒川の行動をじっと見ていて、どう見ても尊敬できる人物ではない、と感じていた。暴言もさることながら、多くのことで、自分の父親と違っていた。例えば、父の机の上は、いつもきちんと整理されていて、梨絵が時々花を持って来て挿していた。今は、書類が散ぜんとして、タバコの灰が、灰皿以外のところに散らかっている。父はタバコを吸わなかったために、今、部屋に充満しているタバコの煙が、父のやわらかい匂いと共に、この部屋で集った素敵な思い出を汚しているように思えた。

社員を「クズ」と言われた道夫は、平気な顔をしていたが、梨絵は、ここで黙っているのは、一緒に働いてきた仲間に対して申し訳ないと思った。

「荒川社長」

そう言って、立ち上がろうとした梨絵の言葉に、多少の怒気が含まれていたために、道夫はあわてて梨絵の後から立ち上がって、梨絵を制するように厳しい目で見た。そして道夫が代わりに話した。

「社長、明日早いんで、取り敢えず、今日は失礼します。な、梨絵行こうか。」

そう言って、無理矢理、妹の手を引っ張って社長室を出た。荒川は、にがにがしい顔でその二人を見ていたが、一人になって、いよいよ握りこぶしを机の上に叩きつけた。

「俺は出世の道だと思って、この会社を引き受けたのに、これでは左遷じゃないか。よし、見てろ、本社から自分の部下だった者を引き抜いて、この会社を一流の会社にして、俺をこんな目に遭わした奴らを見返してやる。」

二週間後、人事発表があった。

荒川社長の指示で、四月から親会社のソラリスから、役員が三名送りこまれることになった。今まで田村道夫が兼任していた、営業部長、汎用技術部長、CAD技術部長に一人ずつ就任する。従って、田村道夫は身ぐるみを剥がされ、総務部長だけになる。また専務は置かず、代りに社長室という部署が作られ、室長になんと梨絵が就任することになった。要するに社長秘書と言ったものである。

そして、その日行われた課長以上の幹部会議で、四月から特に、CAD技術部の人数を、今までの五人から十人に倍増する、と明言した。今年の新入社員はすでに内定していたが、荒川は高卒、専門学校卒の新入社員が気に入っておらず、彼らを全て親会社に出向させ、代りに、親会社の大卒社員をTESに出向させるように要請した。

一連の騒動の中で、小林は努めて、政治的なことを考えないようにしていた。昨年末発表したAI CAD用機械用アプリケーション、AI MECHAは売れ行きが好調で、他に機械用アプリがないこともあって、機械製作会社から注文が殺到していた。

小林は大阪機械のエンジニアから教えてもらったソフトのノウハウを自社アプリに応用し、一つのパッケージとして世に出たことに満足していた。会社内外での騒動をよそに、

タイタニック号で最後までバイオリンを弾いた楽士のような気分浸っていた。

小林とは反対に、町田は情報に敏感で、会社で何か変わったことがあると、すぐに町田が皆にふれまわるので、情報には欠くことがなかった。そして小林の身の回りで少し変化があった。最近、守山が小林を「小林さん」と呼び出したことである。最初は小さい声で口だけ開けて、小林を呼んでいるようであったが今では、

「小林さん」

とはっきり聞こえるようになった。

小林も呼ばれたときは意識して、笑って応えることにしている。時間をかければ、人は必ず分かり合える、という気持ちを再確認し、いろいろ騒動がある割には、気持ちが楽になっていた。

小林は、一つだけ気がかりなことがあった。梨絵が、四月からCADチームを離れて社長室に転属することであった。梨絵は新社長をよく思っておらず、何回か断りに社長室に行ったらしかったが、その都度うまく言いくるめられたようであった。

四月になった。予定通り親会社のソラリスから役員が三名送られてきた。

今まで田村道夫が統括兼任していた営業部長に、稲垣次郎32才、汎用技術部長に、榊啓介30才、CAD技術部長に、澤田弘30才が就いた。みんな親会社では主任クラスであったが、TESでは一気に部長職になった。新入社員では、親会社の大学出新入社員が、10名派遣でTESに送られて来た。そのうち五名が、CAD技術部に入るようになった。

小林は、昨年、自分が新入社員でこの会社に来た時のことを思い出した。あれから様々なことがあったので、10年も経ったように感じた。この一年間は技術を磨くという目標を立てていたが、ほぼ、自分でも満足していた。三ヶ月で、ほぼ平均的な技術はマスターし、一年で、自分と同年のエンジニアと比べても劣らない実力をつけた。崎田のベテラン、トップエンジニアという法螺も、最近では誰も法螺と思わなくなり、崎田自身も本気になって宣伝しているようであった。大阪機械に行っても、大学出の機械エンジニアを相手に堂々と渡りあった。

小林は、しかしまだまだ学ぶものがあると感じていた。数ヶ月毎に、東京のAI CAD社で開かれる、デベロッパーコンファレンスに出席した時など、そうそうたるプログラマーが集い、開発に関する、するどい専門的な質問が相次ぐのであるが、これに関しては、小林はまだまだついていけず、ほとんど何のことを言っているのか、わからなかった。そんな時は、メモを執って、社に帰って、町田や梨絵に尋ねたりした。

町田は、営業的なセンスは皆無であるが、もの知りという意味では、小林の上をいっていた。また町田は、もし答えられないものがあれば、必ず翌日までに調べてきた。梨絵は、町田ほど技術的に、ものしりではなかったが、根が真面目なため、小林の質問、町田の回答をワープロでタイプして、記録として残していた。

三人三様の素晴らしい個性を持ち、得難い仲間であった。だが、この四月で梨絵は、社長室長として社長室に移ってしまった。小林の胸に、ぽっかりと穴が開いたようであった。あの若い社長と梨絵が、二人で同じ部屋にいるということが、とても気になっていた。気持ちを振り切ろうとしても、いつか、部屋のドアが開く度に、遠くに見える社長室を心配そうに除き見ている。

新しく入って来た社員のために、歓迎会が模様された。今年は、人数が増えたのと、部長が三人も入ってきたこともあり、道頓堀の料亭の大宴会場を借りた。昨年とは異なり、豪華な料理と着物を着た仲居さんのサービスに、旧社員は恐縮し戸惑っていた。

社長の挨拶の後、三人の部長が次々と挨拶した。CAD技術部の部長、澤田弘の番になった。小林らは、自分たちの新上司が何を言うのか見守った。

「CAD技術部長の澤田弘です。わたしは元々ゲーム開発にいて、みなさんの知っている有名なゲームの開発を手がけました。CADは初めてですが、開発は上級言語を使うと聞いています。ゲームはすべてアセンブラで開発しますので、CADの比ではありません…、」

要するに、自分の技術自慢であった。

次に、稲垣営業部長が挨拶した。

「みなさん、コピーライターの重田まことさんを知っていますか。」

重田は、テレビの司会も勤める知識人で、勿論誰でも知っている有名人だ。

「実は、ここにお越しいただいております。」

みんなが「わっ」と驚いた。重田は、隣の部屋で待機していたらしく、黒のブレザを粋に着こなして、手を振って現れた。マイクの前に重田と稲垣が、丁度漫才コンビのように並んだ。

「本日は、稲垣部長に誘われまして、みなさんを励ましにやってきました。私と稲垣部長は、古くからの友人で、大学の先輩になります。」

稲垣部長がつかさず、

「W.大出身の方、手を上げて」

と大声で叫んだ。

荒川社長の初め、澤田CAD技術部長、榊啓介汎用技術部長、その他新入社員の内三名が手をあげた。そして田村道夫総務部長もここにこ笑いながら手を上げていた。町田が、冗談で近くだけに聞こえる声で、

「僕も受けたことはあるんですが、落ちた人も手をあげていいんでしょうか。」

と言って、まわりを笑わせた。重田は続けた。

「W.大出身が関西の会社に、こんなにいると思いませんでした。W.大は、ご存知のように自由闊達な気風で、あまり勉強した記憶がありません。」

とおどけてみせたが、もちろん誰もが一流の大学であることを知っていた。

稲垣が重田をフォローした。

「W.大に入った学生は、もともと頭がいいから勉強しなくても大丈夫じゃないですか？」

お互いを褒め合った。男性社員が多いのをみて、稲垣は、

「わたしがいた時は、女優の吉川美智子も学生だったので、キャンパスでよく会いました。かわいらしかったですよ。」

「あれっ、稲垣部長、彼女となんかあったんですか？」

「なにもありませんよ。ただ時々僕の車で送ってあげたりしましたけど。」

この手の会話が20分ほど続いた。最後に、稲垣がW.大出身者を全員舞台に呼んで、有名な応援歌を歌いだした。肩を組んで歌った。途中舞台に上った社長が梨絵にもこっちへ

来るように呼んだ。梨絵はその時、小林や町田のそばにいて、

「わたしは、W.大出身者ではありません。」

と返事したが、社長はなおも手で招いて

「大丈夫、君はK大だからW.大と同等、いやそれ以上の学歴があるから、こっちへ来る権利がある。」

町田はつかさず、仲間だけに聞こえるように、

「どういう意味ですかそれは？」

とおどけて見せたが、町田も、小林も、君江も楽しい気分になれなかった。応援歌は大変な盛り上がりを見せ、最後の「W.大、W.大」という盛り上がりのところは、舞台の上のW.大出身だけではなく、社員全員が合唱した。町田はふざけて、「バカダイ」、「バカダイ」とテレビの漫画に出てくるパロディー歌詞をつけて唄った。小林も歌そのものは好きな歌であったので、やけくそで大声を張り上げた。しかし、何かしっくりこない後味が残った。

CAD技術部は、新部長と親会社からの出向新入社員五名を加え、梨絵が抜けた分を差し引いても、総勢10名の大所帯になった。部屋に対して10人分の机は、ほとんどのスペースを取ってしまっていた。仕方なく澤田は、

「ここは、部長室がないんだね」

と不満を漏らしながら、守山が元座っていた席に座った。

守山は、社員と同じ列の机で、澤田に一番近い所に座った。守山の向かいは小林であった。そして、四月からは一人一台のPCが、各自の机の上に置かれたので、今までのように、正面の人の顔がまともに見えて困るようなことはなくなった。守山は、前と同じ課長職であったが、澤田が直接指揮すると宣言したので、ほとんど存在感がなくなってしまっていた。

昨年と同じように、君江がトレーニング担当になった。昨年と異なり、各自の机にパソコンが載っているので、パソコンを奪い合うことはなくなった。さらにAI CADのバージョンがアップし、マニュアルも日本語になった。

町田は、新しいマニュアルを捲って、

「日本語のコマンドは馴染めませんな、かえって英語の方がよかった」

と言うと、つかさず君江が

「町田さん、英語のマニュアル、読みましたっけ？」

とお返しした。

町田は意地になって言った。

「わたしの言いたいのは、コマンド入力には英語のままなので、日本語の訳をつけると、返って二重に覚えなれないといけないということなんです。」

五人の新卒社員の内訳は、すべて有名私立の男性で、W.大卒が二名、O大卒が一名、D大卒一名、R大卒一名の五名であった。そして、すべて文系出身者であった。

当時、有名大学の理系卒業生は、有名メーカーか、さもなくば給料のよい銀行、商社に

入社するのが常であった。コンピュータソフト技術者は、名前はカッコいいが、休日返上で、朝から晩まで陽の当たらないところで働き続ける、どちらかという、いわゆるブルーカラーに属し、高校卒、専門学校卒がほとんどであった。親会社のソラリスでも大学新卒は、理系から取るのが難しく、ほとんど文系から取っていた。

君江は昨年と同じく、テキパキとトレーニングの要領を説明し、マニュアルを一人一人に手渡して、自習するように言った。五人の新入社員は、自習と聞いて少し不満げであったが、口には出さず、机に向かって練習しはじめた。その様子に気づいた町田は、君江にひそひそ声で、

「一人一台、コンピュータがあるだけでも、ありがたいと思わないといけませんよね。」

と言ったが、即座に

「なに言ってんですか、町田さんは、ずっと一人でコンピュータを占領してたじゃないですか。」

お返しをされて、町田は頭を搔いた。町田は、皆から情報屋と言われるように、コンピュータは元より、社内の出来事、誰と誰が敵対関係にあるか、誰と誰とが恋愛関係にあるかなどというゴシップにいたるまで、ありとあらゆる情報に精通していた。また、根が陽気なもので、新入社員の質問にも積極的に応じてやり、留守がちの君江に代わって、町田がトレーナーのようになっていた。新入社員も町田先生と煽てた。小林は、朝出て、夕方遅く帰ってくる毎日で、帰って来たときは誰もいなかった。守山も、昼間はほとんど社内にいることがなかった。

## 第四話 ごたごた

二週間ほど経って、澤田が、町田と君江を応接室に呼んだ。澤田が煙草に火をつけた。「沖田さん、忙しいのはわかるが、トレーニングを町田君に任せっきりは問題だね。僕は、君に頼んだんだから、もう少し教えてもらわないと。」

町田が割り込んだ

「なにか、クレームでも出てるんですか？」

「いや、クレームという程のものでもないが、トレーニングという割には、全く教えていないようだし、新人の研修もなかなか進んでいないようだし。」

君江は、誤りながらも言いたいことを言った。

「すみません、業務を優先して動いていますので、どうしてもトレーニングは二次的なものになってしまいます。でも忙しい中でも、できるだけ時間を空けて質問を受けようと思っているのですが、こちらから聞くと、質問はその時にはないようなので。」

澤田は、にが笑いしながら

「沖田君、最初ぐらいは、君が前に立って一通り教えてあげるもんだと思うがね。」

部長の言葉に、カチンときたのか、勝気な君江は反論した。

「部長、お言葉ですが、本を読めば一通りのことはわかります。今までは英語のマニュアルで、私も、町田さんもそれを訳しながら自分で勉強しました。今年は日本語のマニュアルになって、何にも難しいことはありません。それに、こちらが忙しいのが分かっているのですから、その都度思い付きで質問をするのではなく、質問をためておいて、まとめて質問すべきだと思います。小林さんなんか、いつもそうしてられましたけど。」

澤田は、若い君江が自分に従順ではない態度を見せたので、驚いてしまい言葉に詰まってしまった。町田が君江を援護射撃した。

「確かに、僕らのときと比べると、なんでもある割には、みんな覚えるのが遅いようですね。同じ質問を何回もすることがあったりして・・・」

澤田は、ここで自分の威厳を見せないといけないと思ったのか。

「彼らは、本社から預かった優秀な社員だ、一流大学を出ておる。」

と言って、次の言葉に詰まった。町田と君江は言外に、「君らと違って」という言葉を読み取った。澤田は、大人げないと思ったのか、少し自分を冷静にしようと穏やかな顔つきにもどした。

「あまり言いたくなかったんですけど、でも言わないと、分かってもらえないと思ひまして。」

君江は、覚悟したように切り出した。

「最初は、「沖田さん」と、皆丁寧に呼んでくれていたんですけど、そのうち、私が中卒で皆より年が若いと分かると、急に態度が横柄になって、「君江」と呼び捨てにして、馬鹿にしたような態度をとるんです。こちらが言ったことも聞く耳を持たないというか、質問する態度でも、煙草をくわえて画面をみたままで、私を呼びつけるんです。わたしはそういうことに耐えられません。」

しばらく沈黙がつづいたが、町田が沈黙を破った。

「実は、私も似たようなことがあります。僕も最初は「町田さん」と、丁寧に呼ばれて、そのうち「町田先生」と煽てられたのですが、僕が皆より年下とわかると、「町田先生」という言い方が、からかうような、皮肉っぽい言い方になって、「町田先生ちょっと来い」という感じで、今は便利屋に使われているような感じがします。」

澤田は、威厳のある顔を無理やり作って、部下を諭すように話した。

「でもね、君たちは明らかに、皆より年下なんだから、それは仕方ないんじゃないか。君たちは確かに、この会社では先輩かも知れないが、年上に対する礼儀というものがあるんじゃないか。」

君江の目がキラリと光った。

「そしたら、澤田部長は、小林さんをどう呼んでられるんですか？」

君江は、澤田が年上の小林に対しても偉そうな態度を取るのを知っていた。

澤田の見せかけの威厳は、この言葉によって簡単に崩れ、顔が赤くなって怒りでどもりながら言った。

「ぼ、僕は部長だよ。なにを思っているんだい。部長が部下を呼び捨てにするのは、当たり前じゃないか。」

怒りが治まらない様子であったが、君江がさっさと席を立って、応接室から出てしまったので、町田も君江を追いかけるようにして出て行った。ただ町田は、部長に遠慮している様子で、ドアから出るときに部長に向かって、

「君江さんには僕から、頭を冷やすように言っときますんで。ああゆう性格ですから、大目にみてやってください。」

と言い残した。

次の日から君江が来なくなった。朝、町田に電話して、体の調子が悪いからしばらく休む、という伝言を残したまま数日が過ぎた。部長に言われて、時々町田が君江に電話をするが、留守番電話になっていた。小林は休み続ける君江が心配になって、町田と梨絵に声をかけて夕方、君江のアパートを訪ねた。

君江は、大阪市の東となりの大東市という所で、木造二階建ての古いアパートを借りていた。二階の暗い廊下を歩いていくと、トイレが共有になっているのか、強烈な匂いがした。町田が、君江の部屋を見つけた。ところが、そこには松田五郎という紙で書いた表札がかかっていた。

小林はドアをノックした。

「は〜い」

低く、じゃまくさそうな男の声がして、ドアが開いた。長髪で髭をはやした、30才くらいの痩せた男が、下着姿のまま睨んでいる。

「すみません。僕たち君江さんの会社の者ですが、君江さんは、こちらにいらっしゃいますでしょうか？」

男は、訪問者が君江の関係だということがわかると、少しほっとしたような顔になった。

「まだ帰ってないよ。何の用？」

ぶっきらぼうに言った。小林が相手を安心させるように。遠慮がちに話した。

「すみません。君江さんの同僚ですけど、もう一週間も休まれてるんで、心配で、皆で様



子を見に来たんです。」

「そう残念やったな。たぶん、もうすぐ帰ってくると思うけど、ここで待つ？」

見ると四畳半一間しかないようであった。生活用品が部屋中に散らかり、部屋の隅の流しに洗っていない食器や鍋が積み上げてあった。

「いえ、様子を伺いに来ただけなので、元気そうなので、安心しました。」

小林はそう言い、三人で頭を下げてその場を離れた。

駅へ向かう道を歩きながら、町田が特ダネをつかんだような顔をしていた。

「びっくりしましたね。君江さん同棲してたんですね。」

「でも、そうとは限らないんじゃないですか？ なにか事情があるかも。」

梨絵が慎重に答えた。町田は、

「まず99%間違いありませんね。二人で撮った写真が飾ってあったのを見ました？」

小林はさすが町田の観察力は鋭い、というように感心した。自分にはない才能である。そして町田は、さらに駅の方から歩いてくる君江も見つけた。

「あれ、君江さんとちゃいます。」

なるほど、近眼の割には夜目も利き、

「諜報部員に商売換えをした方がよいのでは」

と小林が冗談を言っているうちに、君江の方でも気付いたようであった。

「みなさんにご迷惑をおかけしてすみませんでした。」

駅にある喫茶店に入って、四人は話した。君江が元気そうで、皆安心した。話の途中、君江が座り直して爆弾宣言をした。

「私、今日決心しました。オーストラリアに行きます。」

みんなオーストラリアと聞いて唾然とした。町田が目をギョロッとさせて聞いた。

「オーストラリアって、あのカンガルーとコアラの国ですか？ 誰か知り合いでもいるんですか？」

「いいえ、誰もいませんが、最近ワーキングホリデーという制度ができて、働きながら一年間暮らせるというんで、挑戦してみようと思って。」

君江の目は、遠くを見つめるように澄んでいた。もはや迷いが無い、という口ぶりだったので、誰も止める者がいなかった。小林は、会社の悪口などが話題になるのではと心配していたが、君江はオーストラリアへ行くことを熱っぽく話し、後ろ向きの話が一切なかった。町田が、同棲している男の情報を引き出そうと、いろいろ誘導尋問をしたが、その都度、オーストラリアの話で盛り上がり結局聞くことができなかった。

そのうち終電がなくなりかけたので、梨絵と町田は電車で帰り、小林は夜遅いので、君江を家まで送って行くことにした。

小林と君江は、暗い道を家に向かって歩いていた。

小林は普段よく冗談をいうが、他人のプライバシーにはほとんど興味がなく、君江と二人きりになっても同棲の男のことや、会社の問題などを話題にせず、もっぱらオーストラリアの事情などを聞いた。

「小林さん、英語うまいんでしょう。私、全然できないから、どうしようかと思ってるけど。」

「君江さんだったら大丈夫だよ。三ヶ月でなんとかなるさ。」

「また小林さんの三ヶ月の法則ね。」

君江は、小林の得意の、何でも三ヶ月真剣にすればモノになるという「三ヶ月の法則」を事ある度に聞かされていたので、今度は自分の番だという風に笑った。家に近付いたとき、君江が急に話題を変えた。

「小林さんにはお世話になったし、これも何かの縁なので、今まで隠してたこと言うけど、びっくりしないでね。」

小林は何事かと思いながら安心させるように言った。

「僕は大概のことではびっくりしませんから。」

「実は私、定時制高校やめて、ぶらぶらしてたって言ったでしょ。その後、家出してからちょっとだけだけ水商売したのね。」

「水商売って？」

「トルコ行ったことある？」

「えっ？もしかして、あの今ソープランドというやつ？」

「札幌のススキノだったけど、なにか別に悪いことしてると気がしなかったの。どうせ落ちぶれるなら行けるとこまで行って見ようかな、と思っちゃったのね。私の考え方って変ってる？でも変な話だけど根が真面目だから、仕事をきちんとして、お客さんにも受けがよくて、リピート客も増えて三ヶ月でその店のNO.1になったわ。これって、小林さんの三ヶ月の法則と合ってるのね。」

暗闇で小林は、自分が動揺している顔を君江にみられないように自分を落ち着かせた。君江は横にいる小林の顔を見ずに、進行方向前方を見ながら話しを続けた。

「なにか、自分が極限状態に置かれたら、きっと新しい方向性が見えると思ってたんだけど、この商売も普通のビジネスと変わらないのね。19になった時に、わたしって飽きっぽいのね。これもこれ以上続ける仕事じゃないと思って、思い切ってやめて、大阪に来てこの会社を受験したの」

「しかし、よく採用されたね。」

「試験が飛び抜けて一番だったって、田村部長が言ってたわ。あと女だから腰掛程度だと思っただけじゃない。それと、ちょっとね、履歴書、書き換えて。」

「ハァ～」

二人はアパートの前まで来た。小林は、適当な別れの言葉が見当たらなかった。そしてこういう時は、いつも頭で考えずに、その場で心に感じた言葉を口に出すことに決めていた。それがきっと一番自分の生の気持ちを表していると思うのだ。

「辞めるにしても一応自分で会社に電話するなり手紙を書くなりして、事情を話した方がいいと思うけど。それから、居場所が決まったらみんなに手紙でも知らせてください。あと、君江さんは年下だけど、なにか求道者のようなところがあって、道を究めるために、自分の全身を使っていろいろ実験してるように思うけど。違うかな。たぶんこれからも何度も会うような気がするよ。じゃあ、オーストラリアで頑張ってる。」

君江は元気よく笑って、手を差し出した。小林はその小さい手を両手でぎゅっと握った。

「沖田君が辞めた後、何で君も辞めないといけないんだね。」

澤田と守山が応接室で話していた。

守山は一身上の都合で会社を辞めたいと澤田に言った。澤田にとって、守山はさほど気になる存在ではなく、いてもいなくてもよい人材であったが、君江が辞めて、すぐに守山も辞めるのでは、上に管理能力を疑われるという理由であった。

実は、守山はT E Sのライバルである中田興業から引き抜がかかっていた。守山は、課長職であったが、役職に就いたために時間外手当がなくなり、役職手当は二万円固定で、実質的には課長になる前に比べて給与が減っていた。そこに中田興業が、ヘッドハンティング会社を通じて引抜をかけた訳だ。

守山にとってももちろん引き抜きにあっていることは一切言えないし、元々口下手な男なので、「辞める」という一言をいうのが精一杯でそれ以上の詳しい話ができなかった。澤田は守山に、あらゆる方向から思い留まるように説得したが、守山は、よそ見をしているように目をそらして

「辞めます。」

という言葉を通り越した。

両者並行線のまま話合いは決裂、と言うより、一方的に澤田がしゃべりまくり、守山がそれを無視するという形で、最後は澤田が、

「出直して来い。」

と意味不明なことを言って、守山を追い出した。

小林は、その事情を知らなかった。守山が応接室から帰って来て、小林を見つけると、興奮した勢いもあって、初めて大きな声で小林に話しかけた。

「小林さん。」

小林は、一瞬誰が呼んでいるのか疑った。間違いなく、守山がこっちを向いて、話しかけていた。

「あの、今日時間あるかな。ちょっと飲みにかへん。」

小林は、何事かと思いながら、

「ご存知のように、僕は下戸ですけど、一杯くらいやったら付き合えますが。」

「ああそれでええんや。」

と守山が言った。

小林と守山は心斎橋まで歩いて、テーブルのある居酒屋に入った。

小林はあまり飲めないため、瓶ビールを注文した。なんと守山がビール瓶を持って、小林のグラスに注ぎ始めた。小林は恐縮すると同時に、何の話が始まるのかとドキドキしていた。

守山は、小林が一口飲む間にグラスを開けて、次々とビールや焼酎を注文した。酔いが回ってくると、守山が切り出した。

「小林さん、知ってるでしょ、僕が辞めるの。」

「えっ。」

何も知らない小林は本当に驚いた。

「辞めるって、」

「えっ、知らなかった？まあええわ。僕ねこの会社やめて、ライバル社で働くことになりました。」

かなり酔っているようで、大事なことを大声でしゃべった。ここで町田であればつかさず、どこの会社で、給料はかなり上がるのかなど色々聞くところであるが、小林は別の質問をした。

「以前君江さんから聞きましたけど、守山さんのお母さん、ご病気はいかがですか？」

守山は、小林が全く期待していないことを言ったため、何を言っているのか分かるのに時間がかかった。意味が解ると、急に顔が崩れた。

「そのお母ちゃんの生活をみなあかんね。わかるか。」

小林は黙って頷いた。小林は彼のプライベートには興味はなかったが、さっきから一つだけ心配事があり、言うか言わぬか計りかねていたが、思い切った。

「守山さん、間違っていたらすみませんが、もしかして、守山さんが今度行かれる会社は、中田興業さんですか？」

守山は、「なんで知ってる」という疑いの顔に変わった。

「いや、実は私も中田興業に声をかけられたんですが、私はまだ修行中だということで、断りました。」

そう言ったものの、本当の話は、中田興業の商売の仕方に前々から疑問があり、移っても長続きする自信が持てなかったということがあった。最初のうちは、ちやほやされるだろうが、技術的なノウハウを教えてしまえば、用済みということで、捨てられてしまうのではないかと心配になった。ただ守山は、すでに会社を辞めると部長に宣言している以上、この会社にも遅かれ早かれ居場所はないであろう。たぶん、引き止めても無駄であろう。

「守山さん。もし中田興業さんに移られるようなことになっても、同じ業界ですから遠慮せずに連絡してください。もし、会社に残ることになっても今まで通りですから、何か私がすることがあったら声をかけてください。」

小林の精一杯のはなむけの言葉であった。

「ありがとう……いろいろすまなかった。」

守山が下を向いて、誤るように言った。小林は、口下手な彼にとって、これが最大級の詫び方だということを感じ取った。

## 第5話 アメリカ出張

それから三ヶ月経った1987年夏。守山は結局会社を辞め、転職して、中田興業のCADプログラム課長になった。そして、目立ったことがなかった秋田が、総務部に配置転換され、CAD技術部には、澤田部長を筆頭に、小林、町田、新入社員五名という構成になった。

そしてニュースとしては、小林が主任になったことである。町田に言わすと、何で課長にしなかったのか、何をもったいぶっているのかということであったが、小林は、中途半端な形で管理職になるより、今の仕事を続けたかった。むしろ、もっともっと技術を吸収したいという気持ちが抑え切れなかった。幸いなことに、AI CADはバージョンを重ねる毎に有名になり、今や、パソコンCADではNO1になった。さらに、大型機を使っていた企業がダウンサイジングの波にのって、安いパソコンを使い始めたため、AI CADの需要は飛躍的に伸びた。そして、このころからAI CADは世界の標準CAD、と呼ばれるようになった。

それから数日経って、小林は、営業の崎田課長から電話を受けた。

「小林さん、アメリカ行けへん。いや、CADEXが10月、ディズニーランドのあるアナハイムで開かれるの知ってるやろ。それでAI CAD ジャパンが、各ディーラーから一人ずつ招待する言うてるね。一週間やから業務にも差し支えないやろ。まあよう考えて返事して。」

急いでいるのか一方的にそう言って電話を切った。小林は、突然の話にびっくりしたが、まずCADEXが何か知らなかった。町田に聞くと

「小林さん何言っているんですか。世界で一番大きいCADとCG（コンピュータグラフィックス）のショーですがな。日本のCGショーなんかそれを真似したものでその何倍も大きいもんですよ。」

とあきれた顔をした。

小林は願ったりと思ったが、一応、澤田部長に相談してみることにした。澤田は、普段から見識を広げるために、コンピュータ関連のショーやトレーニングを奨励していたので、快く受け入れてもらえると思っていたが、どうも歯切れが悪かった。

「そうね。今回は社長もツアーとは別にショーを見に行くといっているし、どうしたものか。」

そう言って考え込んだ。そして、言いにくそうに続けた。

「CADEXに行く一番の目的は何だと思っ？」

「はあ、たぶん、世界の技術を目のあたりに見るとのことと、今後、どのようにCADが展開されていくか実際に見て、次の開発の指針を掴むことだと思っていますが。」

「君はまだ若いね。」

年下の澤田が言った。

「AI CADが主催しているツアーには、誰が来ると思う。みんな日本の名だたる会社の部長、課長クラスだよ。そういう人達と一緒にアメリカを回って交流するのが最大の目的

じゃないか。」

そう言った後

「まあ、考えとこう」

と言って、話は終わった。小林は、ツアーの目的が日本のディーラー同士の交流の場である、と言われて少しがっかりしてしまった。そうであれば、下戸で、付き合いもよくない自分は適任ではないと感じた。

三日後、客先に行く用事があって、営業課長の崎田と朝、駅で待ち合わせた。電車の中で崎田が小林に聞いた。

「アメリカ行き、考えてくれた？」

小林は、澤田から何も返事をもらっていないので

「僕は行きたいんですが、澤田部長の話しによると、どうも今回は僕の行くようなツアーではなさそうなので、一応、澤田部長に下駄を預けた形です。」

崎田は皮肉な笑いを浮かべた。

「小林さん、あんた正直すぎるわ。そんなこと言うて、あの澤田は、自分が行きたいに決まってるやんか。あんなんアメリカ行かしても、会社の金使こうて、宴会だけして帰ってくるのが落ちやで。あいつらは遊び慣れてるからな。おいしい話は、匂いでわかるんや。」

小林は、正直そういう風に考えたことがなかったので返事がすぐにできなかった。崎田が続けた。

「小林さん。僕はね、あんたやったら、きっと何か新しいものをつかんで帰ってくると期待してるねん。この一年で、やたらとライバル社が増えたやろ。うちらみたいいな小さい会社は、次々と新しいものを作らな競争に負けてしまうんや。あのアホめ、今度会うたら言うといたるわ。」

次の日の夕方7時ころ、小林が会社に帰ってくると、崎田が応接室で大声をあげているのが聞こえた。崎田は、澤田部長と自分の上司である稲垣部長を前にして、怒り心頭という感じであった。稲垣が、

「崎田君、澤田部長は、元々ゲーム開発にいたんだよ。ラスベガスのゲームショーに行ったりしたこともある優秀な技術者だ。一番適任だと思うがね。」

崎田は、皆で飲みに行った時にそのような澤田の自慢話は何度も聞かされていた。だが、崎田は長年の営業の勤で、澤田の正体を見抜いていた。

「こいつは、口だけで世間を渡って来たペテン師だ。」

というのが崎田の結論であった。

確かに澤田のチームが開発したゲームの最後に、「ディレクター・澤田弘」という名前が登場する。これを澤田がいつも自慢しているが、崎田から言わせれば、自分で開発したという気迫が感じられない。きっと、世間によくあるところの、開発者を飲み連れて行ったり、機嫌をとったりしただけの調整型マネージャーであろう。現に入社してから四ヶ月が経過しているのに、CADのことを勉強した形跡がない。CADの知識も崎田の方が未だに上である。

「稲垣さん」

崎田は直接の上司、稲垣営業部長に対してもそのように呼んだ。

「今度のショーは、CADショーでしょうが、ゲームショーとちゃうやんか。」

怖いものなしの崎田は、顔を真っ赤にして今にも殴りかかりそうな雰囲気であった。稲垣と澤田はこの種の灰汁の強い人間は、中学生のころ以来関わり合ったことがなかった。普段から崎田の態度はいつも腹立たしくは思っていたが、直接叱ったり、注意したりする勇気はなかった。

丁度、中学生の時に、いじめっ子に直接喧嘩をふっかけられない秀才が「おれは偉くなって、いつかこいつを見返してやる。」

と心で誓った、そのような光景が蘇っていた。

ただ崎田は営業成績が良く、極端に言えば、崎田がいなくなればT E S が危うくなるというくらい稼いでいたので、社長でも、きつく言えない事情があった。

「稲垣さん、とにかく俺は反対やからね。」

そう言い捨てて、さっさと部屋を出ていった。そこに丁度、小林が居合わせた。

「ああ小林さん。あんたもあのアホに使われて大変やね。じゃあ。」

その後、数日経っても小林には何も知らされなかった。町田の情報によるとどうも澤田部長という線で決まりそうだ、ということであった。そして、そこに事件が起こった。

A I C A D ジャパン社から新社長が一人で挨拶に来た。

新社長訪問のことは、数日前に知らされていて、T E S も社長が出迎えるように準備していたが、新社長が外人だということは、崎田以外誰も知らされていなかった。崎田はその情報を握ったまま当日まで誰にも言わないでいた。

最初に受付を兼任している営業部の女性が、あわてて営業部室に飛び込んで来た。

「外人や、外人が社長に面会しに来た。」

その時、崎田がにやっと笑って答えた。

「お前もつときちんとじゃべれよ。その外人が A I C A D の社長ミスター、ジョージ、オーハラ (Mr. George O'Hara) やんけ。」

オーハラ (O'Hara) という名前は知らされていたが、それが英語の苗字だとは、崎田以外知らなかった。

それから、てんやわんやの騒ぎになった。オーハラ氏を応接に通したまま、幹部が右往左往していた。荒川社長は、普段ダンディーに構えているのだが、急に落ち着きがなくなっていた。

「応対するのがいやや」

だだをこねる受付嬢に代って、梨絵がコーヒーを運んだ。

「Thank you. (ありがとう)」

まだ30代であろう金髪でハンサムなオーハラ氏が梨絵を見た。梨絵は、

「You are welcome. Would you please wait a moment? Our managing director is coming soon. (どういたしまして。少しお待ち願います。社長がすぐにまいります。)」

と挨拶して部屋から出た。

結局梨絵を通訳にするということで、荒川社長以下、四名の部長が勢ぞろいで、狭い応接室に入った。型通りの名刺交換をして、握手をしながら頭をペコペコ下げた。

「梨絵君、どうぞよろしくは何だったっけ。」

頭をかきながら、稲垣が聞いた。

梨絵は英語にはない表現なので返答に困った。

「とにかく、初めてなのでですから、**How do you do?** でいいのではないのでしょうか？」  
そこに急にドアがノックされた。梨絵に

「国際電話がかかってきたので、ちょっと出てほしい。」  
という連絡であった。

何かと思って梨絵が部屋の外に出たが、誰もそんな電話を受け取っていなかった。崎田は梨絵にウインクして、

「ちょっと様子を見てみよやないの。梨絵さん、もうちょっとこっちにいて。」

応接室では、オーハラ氏の話に合わせて、造り笑いを浮かべた荒川が、軽くうなずいていた。稲川、榊、田村道夫も顔を崩して、にこにこしていたが、もっぱら話し相手は澤田であった。

澤田は「**Yah**」と「**Wonderful**」を交互に叫んでいたが、オーハラ氏の質問の意味が解らないらしく、返事を求められると「**Pardon?**」を繰り返した。途中オーハラ氏が、

「**Excuse me, may I use the restroom?**」

と言った。澤田があわてて、

「休憩室があるかと聞いております。なにかお疲れのご様子で。」

と訳した。荒川がにがい顔をして、

「ばか、トイレのことを言ってるんだ。」

と叱った。恐縮した澤田は、オーハラ氏をトイレの入り口まで案内した。

オーハラが、トイレの洗面所で手を洗っている時、一人の男がドアを開いて入って来た。オーハラは巻き込み式タオルの扱いがわからずその男にたずねた。

「**Excuse me, do you know how to use this machine?** (この機械をどう使うか知ってますか?)」

その男は

「**I'll show you what to do.**(お見せしましょう。)」

と言って、巻き込み式タオルの使い方を教えた。

オーハラは

「**That's a wonderful idea!** (すばらしい!)」

と言った。

「**This is a Japanese invention. Do you know the shower toilet? That's another great invention of Japan.** (これは日本の発明です。シャワートイレをご存知ですか?それも日本の誇る大発明の1つです。)」

「**Sorry, what is the shower toilet?** (すみません。シャワートイレとはなんですか?)」

オーハラが質問した。

男は、にこにこ笑いながらトイレの便器まで案内し、便器の横についているコントローラを操作して見せた。このころ丁度シャワートイレが出たところで、このビルでも一台が試験的に使われていた。オーハラは、

「**That's wonderful! I will try next time.** (素晴らしい、今度使ってみます。)」

と絶賛した。男が

「**Are you visiting TES?** (TESにお越しですか?)」



と聞いた。

「**Yes, my name is George O`Hara.** (はい、私の名前は、ジョージ、オハラです。)」

といて握手を求めた。男もにっこり笑って言った。

「**I`m Takeshi Kobayashi. Would you please come with me.** (私は、小林たけしです。どうぞ一緒にお越しください。)」

応接室で恥をかいた澤田は、梨絵を連れ戻しに部屋の外に出た。荒川は、澤田が梨絵を探しに出て行っている間に他の部長に向かって言った。

「それにしても、澤田君の英語はたいしたことないな。俺でも、喋れなくても内容は理解できてるのに、彼はミスター、オーハラが言ってる内容もわかってなんじゃない。ラスベガスでスロットマシン相手に遊んでたんじゃないの。」

と皮肉った。

そのうち澤田が梨絵を連れて帰って来た。そしてさらに小林が、オーハラ氏を連れて来た。挨拶して行こうとする小林をオーハラ氏が引き止めた。

「**His English is excellent! I`ve never seen a Japanese person who speaks such a good English.** (彼の英語は素晴らしい。私は、日本人でこんなにうまい英語を話す人に会ったことはありません。)」

と絶賛した。

その光景を終始見ていた崎田は、

「他がひどすぎるんで、小林さんが目立つだけやないか。」

と営業部員に聞かせて皆を笑わせた。

情報屋の町田も、その光景を覗いていたが、新入部員が、

「町田大先生は、普段から物識りということですから、行って話してきたらどうですか？」とからかった。町田はメガネを拭きながら

「これがフランス語か、ドイツ語やったらよかったのに。」

と真面目な顔で答えた。

結局、小林がほとんど通訳して、この難関を乗り切った。オーハラ氏は、最後に小林に是非アメリカに来ることがあれば、本社に寄ってほしいと告げた。澤田が何を思ったのか、

「**He will go to America this year.** (彼は、今年アメリカに行くでしょう。)」

とこれだけは、タイミングよく返事した。

そして結局、今回のアメリカ行きは小林になった。

1987年10月、小林はロスアンジェルス行きのジャンボジェットの中にいた。

「CADEXショー、ならびにA I C A D本社視察ツアー」と題したツアーで、総勢30名がその日の夕方、成田空港に集まった。ほとんど三十-四十代の企業の間管理職で、参加者全員が男性、女性はA I C A Dジャパン社から通訳ガイドとして送り込まれた一名と、旅行会社添乗員の一名だけであった。小林は商社時代南アジア担当だったのでアメリカは初めてであった。旅行会社が作成してくれたスケジュール表を読み直していた。ロス空港到着後、バスで、ディズニールランドのあるアナハイムへ、そのコンベンションセンターで、今回のCADEXショーは開催されている。三日滞在の後、サンフランシスコへ飛行機で移動、A I C A D本社表敬訪問、サンフランシスコ二日滞在の後帰国。

またC A D E Xショーの会場説明があった。ショーは「ディスプレイ」と「セミナー」と大きく二つに分かれる。ディスプレイの方は通常のコンピュータショーにもあるような大きな会場に、一件ずつ各企業がブース（店）を出すものであるが、セミナーの方は別会場で催される。技術者向け、営業向けなど専門セミナーが同時に三-四本あり、会場に着いた時点でセミナーの予約を入れないと満員で断られる可能性がある、と書いてあった。隣に座っていた五友システムの課長が、小林が広げているスケジュール表を覗き込んだ。「すごい勉強家ですね。」

そう言ってにこにこした。彼の手には「ディズニーランド攻略本―一日で制覇」が握られていた。小林が尋ねた。

「アメリカには、何度も行かれたことがあるんですか？」

「いや、私は外国も初めてで、英語も解りませんから、皆さんの後から付いて行きます。」

にこにこしながら答えた。これが澤田部長の言ったようなツアー客だなあ、と思いながら、自分はこの雰囲気には流されないようにしないといけない、と気を引き締めた。

窓の外に目を向けると果てしない太平洋が広がっていた。確か社長と梨絵は、明日の同じ便でロスに来ることになっている。社長と梨絵がファーストクラスの席で楽しそうに笑っている様子を想像した。荒川社長には妻も子もいるが、町田によると、プレイボーイでならしてきたようで、親会社にいた時も噂が絶えなかった、ということである。

「心配してもしかたがないが、でも何だろうこのどんよりとした胃の痛くなるような気分は。」

小林は、目を瞑って明日に備えることにした。

当時コンベンションセンターは、日本であれば東京晴海、大阪インテックスが有名であったが小林にとって、このアナハイムのは、その何倍にも見えた。隣にディズニーランドがあるので、ここに来たほとんどの人は、帰りにディズニーランドに寄って行く。ただ、小林にとって、三日間のショーでも短いように思え、ディズニーランドどころではなかった。

小林は、まずセミナーの予約をして、余った時間で会場を回ることにした。取ったセミナーは、例えば「**CAD in Future**」というこれからのC A Dの大きな流れを紹介するものや、「**AI LISP Special Technique**」という開発言語の専門講座まで貪欲に知識を求めた。セミナーはもちろん英語で行われ、アメリカの一戦級技術者や、大学の教授などが講師になった。

セミナーでは、OHP（オーバー・ヘッド・プロジェクター）やスライド、そして新しく出始めたP C用プロジェクターという視覚に訴えるものを使って、外国人でも分かるように説明していたが、それでも、小林の英語力をもってしても、半分くらいしか聞き取れなかった。小林は日本人が学ぶ英語が如何に実践向きでないかを痛感した。

セミナーを録音したテープが後ほど販売されることになっていたが、小林は一番前の席に座り、密かに自分で持ってきた小さなテープレコーダーを回して録音した。今回、小林は会社に頼んで、英語の名刺を刷ってもらっていたので、セミナーが終わってから、講師と積極的に名刺を交換した。第一日目が終わり、へとへとになってホテルに帰った。

ホテルは、特に希望がない限り二人一部屋があてがわれた。小林と相部屋になったのは、なんとあの守山が転職した先の中田興業の社長、中田幸吉53歳であった。

中田興業は、もともと事務用品の販売が主で、本社は大阪で全国主要都市に支店をもっていた。二、三年前から拡大傾向にあるCADビジネスに目をつけ、積極的にヘッドハンティングをしてきた。

夜中、小林が寝ていると、電気がついて中田が帰ってきた。どこかで飲んでいたようで、酒臭かった。そして、バタバタと大きな音を立てて着物を着替え始めた。

「ごめんね。起こして。」

声は、ろれつが回っていない酔っぱらい声であった。小林は、

「いえ、大丈夫です。」

と返事したものの、隣のベッドに座って、たばこに火をつけてパカパカ吸い出したのには閉口した。煙が小林のベッドまで来た。さらに小林がまだ起きていると思ったのか、話かけてきた。

「小林君は確か、うちの守山が前にいた会社から来たんやね。」

その無遠慮さとあつかましさに腹立ちの方が先に立ったが、これから何日か一緒にいないといけなこともあり、軽く「はい」と返事をした。

「小林君は英語がわかるの？わしは全くわからんから雰囲気だけでもと思うて、来たけど。」

小林は、一々返事して酔っ払いに付き合っていると、夜が明けてしまうように思え、はっきりと返事せず寝てしまったような芝居をした。その間でも酔っ払いは一方的にしゃべり続けた。

小林がふらふらして、本当に寝てしまいそうになった時に、急に目が覚めるようなことがあった。酔っばらった中田が、独り言でつぶやいたことで、

「あの能無しの守山は、わしらが何聞いてもわからん、と言うだけでCADのこと何も知りよらん。スカ（はずれの意味）引いたようなもんや。小林君ね、ね、小林君、守山は、君んどこでも問題やったんやないか？」

小林は、頭が冴えてしまったが、そのまま寝たふりを続けた。

ショー二日目、一日遅れで荒川社長と梨絵が合流した。

ホテルで朝食を一緒に取っている時に小林は、ここのシステムや、見ておいた方がよいブース（店）を紹介した。荒川は梨絵にメモを取らせ、黙って話を聞いていたが、いきなり話を途中で切った。

「それはそうと、私は、誰と名刺を交換したらいいんだい。」

小林はVIPに対する表敬という様な、準備をすることは考えてもいなかったもので、びっくりして言葉に詰まった。梨絵があわててフォローした。

「それは、私が小林さんに頼むの忘れていました。」

「えっ、やってないの。なんだ、それじゃあ、僕は何のためにここに来たんだね。」

小林と梨絵は恐縮したが、梨絵にしても、社長からそんな話を聞くのが初めてだった。要するに、以前AICADジャパンの社長が来た時に、恥をかかされたお返しであった。その証拠に、午前中ショーをちょっと見学した荒川は、午後には梨絵を無理矢理誘って、

ゴルフに行ってしまった。

小林は、この日も必死になってセミナーとブースを駆け回り、昨日の寝不足も手伝って、夕方ベッドに入ったら食事も取らずに寝てしまった。

ショー最終日になった。

前日までに専門的なセミナーは終了し、この日は日曜日ということもあり、一般客も入れたため、ひどい込み具合になっていた。各ブースでゆっくりと説明を聞くこともできなかった。また、最終日ということもあって、ほとんどのブースで、三時ころからワインをかたむけ始め、お祝いムードになっていた。

小林は両手にたくさんのパンフレットが入った紙袋をぶら下げて、ホテルへ一旦帰ろうと思ったときに梨絵と出会った。梨絵は一人で見学していた。

「あれ、社長は一緒じゃないんですか？」

梨絵は、小林に出会って一瞬うれしそうな顔をしたが、うれしそうな顔を見せるのは、はしたないと思ったのかすぐに顔を作り直した。

「ええ、午前中は一緒に回ってたんですが、またゴルフに行っちゃって。」

「梨絵さんは行かなかったんですか？」

「私、まだ見てないところがたくさんあったので断りました。」

梨絵は、小林が自分を社長の秘書と思っているのが不満だという素振りを見せた。

「でも、もうなんかショーも終わりかけて、どこでも酒盛りしてますよ。」

「そうですね。」

梨絵が小さく答えた。小林が、たくさんの紙袋をぶら下げているのを見て、

「すごい資料ですね。みんな持って帰るんですか？」

「いえ、これからホテルに帰って、必要な資料と必要でない資料をより分けます。」

そう言って、

「じゃあ」

と手を上げて、帰ろうとした時、梨絵が話しかけた。

「あの、小林さんは、ディズニーランドに行ったことがあります？」

「いいえ、東京のディズニーランドも、まだ行ったことがないんです。」

答えて、小林は、梨絵がもしかしたら自分を誘っているのではないかと思ったが、自分の一人よがりかも知れないと思い直し、確かめてみようと思った。

「梨絵さんは、夕方、社長と食事を一緒にするんじゃないですか？」

梨絵は、小林の誘導尋問に怒ったような顔をして答えた。

「ちがいます。私は、今日は一人です。」

勢いで、大きな声を出した梨絵は、なにか変な意味で取られたのでは、と頬が少し赤く染まった。小林は、こういう駆け引きは普段から苦手で、すぐに茶化してしまうのだが、梨絵が真面目な性格なので、あまり傷つけてはいけないと思い、ストレートに言うのが最善だと判断した。

「今からディズニーランドに行きませんか？梨絵さんも初めてですか？」

「ええ。」

と返事したが、実は、一度出来たてのころの東京ディズニーランドに行ったことがあつ

た。梨絵は自分でも、なぜうそをついたのか分からなくなり、下を向いたまま顔がみるみる真っ赤になっていった。

「でも、今から行って大丈夫かなあ。」

「あの、今日は日曜日なんで、夜中まで開いてるって言ってましたけど。」

小林は、70年の大阪万博の時は中学生で、地元ということもあって、ほとんど毎週通ったくらいのテーマパーク好きであった。もっと小さいころは年寄った父親に甲子園にある「阪神パーク」、「奈良ドリームランド」など毎週のように連れて行ってもらった記憶がある。

ただこの10年は、ほとんどそんな記憶がない。大人になったといえればそれまでであるが、考えてみると映画館にも行ってない。要するに、一緒に行きたいと思う相手がいなかったというのが、その一番の原因であった。

ディズニーランドの入場ゲートはアメリカ開拓時代の田舎の駅を思い起こさせるような簡素なものであったが、この簡素さがサプライズの始まりであった。ゲートを抜けて、梨絵と一緒に「眠れる森の美女の城」に向かって歩いていく小林の遠い記憶の中に、子供のころに見た、故ウォルトディズニーが司会をしていたテレビ番組、「ディズニーランド」のことが蘇って来た。

ディズニーランドには「未来の国」「おとぎの国」「冒険の国」「開拓の国」の四つの国があった。それぞれの国から一回分のテーマを選んで、アニメ、動物物語など夢と魔法の物語が展開された。小林は、何か過去に置き忘れてきた大事な記憶を思い出したような気分になってわくわくしていた。

しばらく歩いていくと、薄暗くなった夕焼け空に、「眠れる森の美女の城」が、シルエットになって浮かび上がってきた。そして突然、青と赤の輝く光の帯が上空に流れ、「眠れる森の美女の城」をキラキラとライトアップした。二人共、あっと息を呑んで城を見つめた。オーロラ姫が捕らえられている塔の辺りが赤紫色にキラキラと怪しく輝いていた。

「いや、ぼくは今まで、ディズニーランドのことを忘れていたのですが、今のことで、なんか子供のころを思い出しました。」

梨絵もうれしそうな顔を隠さずに言った。

「本当に来てよかったですね。」

「あのお城に行ってみましょうか？あの中に入れるんですかね？」

「遠くから見ると、大きく見えますけど、あの城は、小さくて中に入れなかったと思います。東京では、シンデレラ城になっていて、もっと大きくて、ツアーができるようになってるんです。」

そう言って梨絵は、ハッとし、さっきの嘘がばれてはいけないと思い、言い訳を付け足した。

「確か、そう、ガイドブックに書いてありましたけど。」

小林は、なにも気付かなかったかのように、ただ涼しい顔で、飄々と城を眺めていた。「梨絵さん、今日は僕ら子供になって楽しく遊びませんか？ね、次は何して遊ぼかな？という感じで。」

「ええ、面白そうですね。」

梨絵も声を弾ませた。小林は突然歌い出した。

「さあ始めましょう。歴史、コメディ、ファインタジー、変わらぬ自然に秘めた数々の秘密、遥かに想いめぐらす、空と海と山の、素敵な様、みんなでみよう、おしゃれで、素晴らしい、カラーの世界。」

そう歌って

「これ何の歌か、知ってますか？」

と聞いた。梨絵は首を横に振った。

「僕が子供の時に見た、ディズニーランドというテレビ番組のテーマソングです。うろ覚えで歌詞が間違っているかもしれませんが。ウォルトディズニーが司会してたんですよ。」

「うちの父だったら、知っているかも知れません。」

そう言って、茶目っ気たっぷりに、かわいらしい舌をペロッと出した。小林は、普段真面目くさった梨絵しか知らないのに、驚くと同時にディズニーランドの持つ魔力を感じた。

アトラクションの入口はなんの変哲もない開拓小屋であったり、普通のカフェのように見えたりしたが、奥が深く、中に入っていくに従って豪華で華やかになるという、今までの遊園地とは逆の発想があった。また「白雪姫」、「ピノキオ」、「ピーターパン」、どの人形を取ってみても精巧なロボットのように見え、今までに見たことのないディテールで、生きているような表情豊かな細かい動きをしていた。そして縫いぐるみを着た、ミッキーマウスなどのキャラクターが本物になりきっているのに感動した。

「カリブの海賊」のボートに乗り込んだ時、一面暗闇の星空を見上げながら、小林が息をはずませて梨絵に語った。

「いや本当に感動しました。大の大人が子供たちを楽しませるために、ここまで精巧なおもちゃを作るというのはすごい。」

「確か、ウォルトディズニーは、子供のためのテーマパークを造るのじゃなくて、家族みんなが楽しめるものを造りたかったって言ってましたわ。子供だけを遊ばせる遊園地ではなくて、大人が子供になる世界ですね。」

梨絵は、洞窟の吸い込まれそうな暗闇を見つめてそう言った。すこし呼吸をおいて、

「家族で来ると、もっと楽しいでしょうね。」

と独り言のようにつぶやいた。

小林は梨絵が言った家族が、梨絵の今の家族のことを言っているのか、それとも未来の自分の夫や子供の話をしているのか、計りかねた。

「僕らは、CADの技術を、工作機械や、建築などの産業にしか使えないと思っていたけど、こうして見ると、将来こうゆう夢の産業でも活躍できるかも知れませんね。いや、今日は、ほんとにここに来てよかった。CADショーを見ただけでは、片手落ちになるところでした。」

そう言っているうちに、二人を乗せたボートがガタガタと音を立てて急降下し始めた。周りが真っ暗なのと、話に気を取られていたために、二人共、これからボートがどうなるのか予想がつかず、あわててしまった。梨絵は普段の冷静さを忘れて、

「キャー」

と叫んで、小林の腕をつかんだ。小林は、目をつぶって、自分の腕にしがみついて来た梨絵の、暖かい、ほのかな息を首筋に感じながら、あらためて、ウォルト・ディズニーが言った「大人が子供になる世界」に感謝した。

それから二人の子供は、次は何して遊ぼうかと、目を輝かせて、ピーターパンのように夜のディズニーランドを飛び回った。そして、ドキドキわくわくの夢と魔法の時間があつという間に流れた。五時間も経ったというのは、時計だけが知っていた。

やがて終園が近づくにつれて二人共、夢から覚めるのが怖いような、とても寂しく切ない気持ちになっていった。小林がゲートに向かう帰り道、梨絵に話しかけた。

「いや、今日はほんとに楽しかった。いやなことを全部忘れて、子供に返って、素晴らしい一日でした。」

さっきまでうれしそうに笑っていた梨絵は、急に寂しそうな表情に変わった。

「あのゲートを越えたら、また現実に戻るんですね。」

そう言った途端、梨絵の中で、熱いものが急にこみ上げて来た。なんだが気持ちが抑え切れなくなり、小刻みに震え出したのを小林は見た。梨絵は震えながら、小さな涙を流していた。

「わたし、いやなんです、今の仕事。でも、なんとか我慢してるんです。」

梨絵はそう言って、涙で濡れた目で小林に訴えた。梨絵の潤んだ目は、

「あなたが近くにいるから、我慢してるんです。」と語りかけていた。

小林は、どうもこうゆう場面は苦手であったが、時々、自分も胸の中に空洞があいたような気持ちになる寂しさの原因が分かったような気がした。

ホテルは、同じホテルだったので、ロビーまで送った。そこに突然荒川が現れた。荒川は、ロビーで梨絵が帰るのをかなり待っていたようであった。

帰って来た梨絵と小林を見比べて、「ふん」と鼻で笑ったが、わざと事務的に言った。

「梨絵君、こんなに遅くまでどこに行っていたんだ。今からでもいいから、明日のA I C A D本部のための打ち合わせをしよう。」

そう言って、小林に遠慮するように頭を振った。

梨絵はなにか急に怖くなった様子で

「小林さんにも聞いてもらったらどうでしょう。」

と言ったが、荒川はいらいらしながら

「席は二人分しか予約してないから。」

と、小林を帰した。小林は梨絵が自分に助けを求めているように思い、後ろ髪引かれる思いだったが、仕事の打ち合わせのためだと言われると、引き下がらずを得なかった。そしてせめて梨絵が気丈でいることを祈るしかなかった。

次の日、ツアー客は、ロス空港からサンフランシスコまで飛行機で飛び、そこからバスでA I C A D本社に直行した。荒川と梨絵は、別便で向かった。A I C A D本社は海が見えるリゾートの真ん中にあり、10月というのに、皆ノーネクタイで気軽な服装であった。受付にいた男性が、大きなハサミを持ってウインクした。A I C A Dジャパンから添乗で来ている女性が、皆に笑いながら説明した。

「みなさん、ここから先は、ノーネクタイです。ネクタイをしている人は、ハサミで切ると言っています。」

要するに、アメリカ版バンカラであった。技術を誇りにする社風で、服装などは、逆に気にしないということを実践していた。皆、あわててネクタイを外し、かばんに入れた。

30人が、海の見える大きなセミナールームに通された。小林が部屋に入ると、荒川と梨絵が先に来ていた。小林は、梨絵の隣に座った。

最初にAI CADの創始者兼社長のドクター、ジョン、コッカー（**Dr. John Cocker**）が挨拶した。まだ30代半ばの若さであった。

「ミナサン、オハヨウゴザイマス。」

周りのスタッフから、もう午後なので、お早うではないと指摘され、驚いた顔をして

「すみません。コンニチハ。」

と、あいさつした。

それから先はAI CADジャパンの女性が通訳をした。内容は、CADは、産業が盛んな国で多く使われるので、我々は日本を最重要国として認識しているということ。これからAI CADジャパンの組織を次第に大きくしていくこと、日本語対応を含め、日本向けに特化したものを作っていくことなどを話した。

「質問はありませんか？」

と通訳が聞いた。小林は、トップに聞きたい質問を持ってきていたので、手を上げた。周りの人がわかるように日本語で質問した。

「ディーラーとアプリケーション開発デベロッパーをしていますTESの小林たけしと申します。今後のAI CADのことについて、お聞きしたいのですが、まず一点目として今後AI CAD社がアプリケーションを開発する予定があるのか、それとも、今までようにAI CADのコア（核）のところだけ作るのか？

二点目として、日本語に特化したコマンド、例えばJISに準拠した寸法線などを、貴社の方で開発される予定があるのでしょうか？

最後に、これはお願いなのですが、デベロッパーの立場としては、次のバージョン情報などをもっと早く開示してほしいということがあるのですが。以上です。」

通訳がジョン、コッカーに通訳した。彼は驚いたような顔をして話した。通訳が訳した。

「実は、今の質問と同じ内容のことが昨日の会議で議題になり、話し合っておりました。一点目に関しては、今のところ、自社でアプリを作る予定はない。AI CADを名実ともに世界一にするために、コア（核）のところをもっと発展充実させる。

二点目に関しては、日本語に限らず世界各国の工業基準に詳しい者がいないので、すぐにはできない。ただこれは、三点目と関係あります。

アプリケーション開発者との交流をもっと密にして、こちらに来て何ヶ月か訓練を受けてもらうとか、コア部分の開発も手伝ってもらうということも考えています。例えば、ミスター、コバヤシが、こちらでしばらくトレーニングを受けてもらうことも可能にしたいと思っています。」

そして最後に、

「ミスター、コバヤシのことは日本にいるジョージからも聞いていますよ。」

と付け加えた。



小林は、さずが自由の国アメリカだなあと感激した。  
「いや、こちらからもできるだけ協力をさせていただきます。」  
その発言が気に入らないのか、荒川社長が苦い表情で小林を見た。  
「小林君は勝手なことを言うねえ。」  
と梨絵にささやいた。その後、ジェネラルマネジャーからA I C A D社の組織とこれからの計画の説明があった。

それが終わると海に見える屋上で歓迎パーティーが行われた。歓迎パーティーといっても豪華なものではなく、食事はピザだけであったが、社長以下、幹部社員が勢ぞろいして歓待した。

ジョン、コッカーが小林を見つけて一人のエンジニアに引き合わせた。  
「**Michael is our chief engineer. Michael, this is Mr. Kobayashi.** (こちらのマイケルは我々のチーフエンジニアです。マイケル、こちらはミスター、コバヤシ。)」

マイケルと呼ばれる浅黒く痩せたインド系のエンジニアは小林に握手を求めた。小林は握手すると同時に、

「**Namashkar, Aap se mir kal, bahut kush hua.**」

と昔インドにいた時を思い出してヒンディー語で挨拶した。マイケルはびっくりして、ジョン、コッカーに告げた。

「**He speaks my mother tongue! He said "Hello, I am glad to meet you" in Hindi.** (彼は、私の母国語を話します。彼は、こんにちは、お会いできてうれしい、と言いました。)」

そう言って驚きの顔をした。マイケルは小林に向かって、

「**I was born in the States. So I can't speak Hindi very well.** (私は、アメリカ生まれなので、ヒンディー語がうまく話せません。)」

と言った。

小林が見る限り、このA I C A D社はマイケルをはじめ、中国系、やラテン系、アラブ系、アフリカ系などアングロサクソン系でない所謂エスニックの人達が大勢働いていた。小林はこれこそ日本にない光景で、何でも真似が得意の日本人が、これだけは真似できないものであると感じた。日本は、どんなに発展しても日本の中にこれだけ外国人を入れて、一緒に仕事しようなどとは考えないであろうと思い、そこに日本の限界を感じ取った。マイケルと名刺を交換した時に彼が言った。

「**Do you have an Email address?** (Eメールアドレスがありますか?)」

この時、小林は初めてEメールという言葉を知った。なんのことかわからなかったが、

「**Sorry, I don't have it.** (いえ、私は持っていません。)」

と答えた。そして丁度、梨絵が近くに歩いて来たので呼んでマイケルに紹介した。マイケルが、

「**Is she your wife?** (奥さんですか?)」

と言ったので、あわてて否定すると、マイケルがさらに

「**Not yet!?** (まだですか?)」

と言ってからかった。

なぜか梨絵もこの冗談を気にせず笑っていた。この光景を荒川は遠くから苦い顔で見て

いた。

アメリカ最終日、仕事は昨日ですべて終わり、その日は、ショッピングや遊びのために残されていた。荒川と梨絵は、朝の便で日本に帰ってしまったが、小林はツアーで来ていたために皆と一緒にいた。昼間はゴルフに行くグループと、ショッピングに行くグループとに別れたが、小林はホテルにいて、報告書をまとめていた。

夕方、相部屋の中田が部屋に帰って来た。

「皆でストリップを見に行くんやが、小林君も行けへんか？」

小林は、ストリップと聞いてびっくりしたが、本場アメリカのストリップショーも一度は見てみたいという好奇心が沸いた。

「じゃあ、お願いします。」

と返事した。

ツアーのメンバーが全員男性ということもあり、30名中の20名までがストリップショー観戦に参加した。そして残ったメンバーのうち、5名が体調が悪いという理由であった。日本の旅行者から添乗で来ている女性と、A I C A D ジャパン通訳の女性は、さすがにこれには参加しなかったため、案内役は、現地の旅行代理店の日本人男性が担当した。

小林は、パリのムーランリュージュや東京の日劇ミュージックホールのような華やかなものを想像していたが、行った先は、どちらかというとも場末の温泉ストリップショーのようにこじんまりした所であった。舞台はなく、五人掛けのテーブルの上で踊り子が服を脱いだ。

ベテランの踊り子が、体に触ってはいけないというルールを英語で説明したが、中田が「そんなんでもええから、早よ脱げ。」

と日本語で囁し立てた。

周りをみると、チップ次第で抱きついたりもできるようで、中田はしきりに案内役の男性にいろいろ尋ねていた。中田は、小林に言った。

「小林君は独身やから、なんも遠慮することないやろ、わしが金出したるから一緒に遊んで行ったらどうや。」

小林は、中田を好きになれないということもあったが、玄人を相手に遊ぶという気持ちが全くなかった。それに何か、今まで持ったことがなかった不思議な罪悪感を感じていた。

## 第6話 罨

アメリカから帰国後、小林は再び忙しい仕事に戻った。梨絵は疲れがたまっていたらしく、有給を取って休んでいた。

昼近く小林に電話がかかってきた。

「小林さん、俺やけど。」

守山の声だった。

「あのちょっと、どっかで会えへん。近くまで来てるんやけど。」

何事かと思ったが、アメリカで社長の中田が酔いにまかせて守山を非難していたのがずっと気になっていた。とにかく、昼休みに近くの喫茶店で会うことにした。

守山は、以前よりもさらに痩せて顔が青白く見えた。何を言い出すのか、小林はドキドキした。

「うちの社長とアメリカで一緒やったんやてな。」

「うん。」

と小林はうなずいた。

「社長、何か言うてた？」

「いや、別に」

小林はとぼけた。逆に、守山に質問した。

「守山さんは、仕事うまいこといってる？」

「ああ」

守山はあいまいな返事をしたが、なにか切り出そうとして、迷っている感じであった。守山は急に神妙な顔になり、彼にしては珍しく姿勢を正して両手を膝のうえに置いて話した。

「小林さんよ、こんなこと言えた義理やないけど、AI MECHAのコマンドで使ってるソース、ちょっと見せてくれへんかな。どうも、うまいこといかんところがあって、締め切りが迫って困ってるね。」

小林は、守山が言っていることは解ったが、守山が思っているほど、ちょっとしたことではないと思った。

「しかし、それはまずいですよ。」

「頼む、この通りや。」

とって両手を合わせて拝んだ。そして合掌したまましゃべった。

「これをクリアせんかったら、会社首になるかも知れん。」

「具体的には、どうしたらええの。」

小林は困った顔で、取り合えず尋ねてみた。

「AI MECHAの今のバージョンのソースだけでええからフロppyでくれたら必要なところだけコピーさせてもらうわ。」

小林はすぐにNOと言おうと思ったが、少し考えてみることにした。守山は、自分でその重要性についてどこまで気づいているかどうか解らないが、明らかに、スパイ行為である。市販のソフトを違法コピーして使うのとはレベルが違う。見つければ、会社を首にな

るだけではなく刑事訴訟になる可能性もある。断るのは簡単だが・・・

「守山さん、会社のをそのまま渡すことはでけへんけど、例えば、ほしい機能をリストにしてもらえれば、僕がその分を用意します。急いでるんやったら、ここでインプットとアウトプットを言ってくれたら二、三日で渡せるけど。」

小林の頭には会社のをコピーするのではなく、プログラムを一からコーディングして守山に渡してやろうと考えた。それであれば、最低会社のを盗んだことにならない。それでも難しく言えば会社に対する背信行為かも知れないが、これが小林が考えられる最大の妥協案であった。

「今すぐは無理やけど、今夜、家に電話してええか？」

守山が聞いた。

「ああええよ。」

小林は笑って答えた。

その夜、守山が電話して来た。守山にしてはテキパキと、必要なコマンドを小林に伝え、「すまん。」

と一言言った。

小林は電話を切った後、複雑な思いがあった。一つは会社に対する背信行為の感情であったが、もう一つは、守山がほしいコマンドは、ほとんどA I C A Dが元々持っているコマンドをちょっと変更すればできるようなもので、プログラムとして何も難しいものではなかった。守山がT E S社にいる時も、全くと言ってよいくらい、お互いの仕事について話したことがなかったので、守山の実力がどのくらいであるのかということは、全くわからなかった。しかし今回のことで、守山がほとんどプログラムができないということが、分かってしまった。

小林はあらためて、中田社長がアメリカでぼやいていたことを思い出した。今回はなんとか乗り切れても、このままだと、いずれ守山は首になる。自業自得だと言えばそうかも知れないが、母一人子一人という同じ家庭環境にいる者として、何とか彼に頑張ってもらいたい。しかし・・・これは、やはり守山自身が解決する問題であり、彼の今後の生き方にも関係して行くことである。周りの人は励ます程度のことしかできない、というように思った。

その日のうちにプログラムが完成したので、次の日の夕方、小林は守山を呼び出してフロピを渡した。

梨絵が、3日程休んで会社に来たということを小林は聞いていたが、2、3日経っても、社長室から出てきたところを見なかった。少し心配になった。

その週の終わり、金曜日にやっと廊下ですれ違った。

「やあ」

小林は、笑顔で梨絵に声をかけたが、梨絵は頭を少し下げただけで、変によそよそしく挨拶して逃げるように行ってしまった。小林は、梨絵の不安げな表情がとても気になり、休み明けの月曜日まで待てないくらい頭がいっぱいになっていた。

月曜日、小林が出勤すると、すぐに社長室に呼ばれた。そこには正面に荒川、右横に梨

絵がいた。梨絵は、小林が入ってくると同時に遠慮して外に出ようとしたが、荒川がそのままにいるように制した。

荒川が言った。

「小林君、証拠は挙がっているんだよ。」

その声に、まさか、守山とのことを言っているのではと思い、心臓が止まりそうになった。しばらく沈黙がつづき、荒川が獲物を捕らえたキツネのように、にたっと笑って切り出した。

「君は、会社の費用でストリップを見に行ったそうじゃないか。」

小林は、最初その意味がわからなかった。ぼやっとしている小林を見て、荒川は一旦、梨絵の方を向いて「やっぱり」という顔をした。

「いや、ストリップでもなんでも、時間外に個人の費用で見に行くのは勝手だよ、しかし、会社の費用を使って行くのはどうみてもおかしいと思わないか。」

小林は、ようやく何のことを言っているのか分かった、というように気を取り直した。

「はい、アメリカで最終日にそうゆうショーにみんなと行ったのは間違いありませんが、料金はちゃんと自分で払いましたが。」

その声を聞いて、梨絵の表情が急に曇り、不潔だというように顔を横に向けたのを小林は見た。小林は、一瞬、これはなんかの罠ではないかと思った。荒川は、証拠書類を小林に見せた。それはホテルからストリップ劇場への往復リムジンバスバスの請求書であった。

「なるほど、こういうことか」

小林は思った。確かにリムジンバスのことまでは考えていなかった。

「失礼しました。わたしはリムジンのことまで考えが及んでいませんでした。もちろんこの代金は私がお支払いします。」

と言ったが、荒川は怒気を増して、たたみかけるように言った。

「金を払えばいいという問題かね。大事な出張中に、こんな失策をするなんて、親会社や、ライバル会社にこのことが知れたら、とんだ恥さらしだ。」

小林は、

「そのライバル会社の人もほとんど参加していた」

と言いたかったが、何か、まともに反論する気になれなかった。こんなつまらないことしか言えないのであれば、言わせておけという気になって、黙っていた。ただ、梨絵には後で詳しく説明しようと思った。

荒川は、いよいよ調子に乗って、ストリップなどというものはまともな人間の行くところでないとか、女性を蔑視しているとか、梨絵にわざと聞こえるように説教した。誰が流したのか、小林のストリップショー行きは、瞬く間に社内に広がった。しかし、どちらかというところ

「あの小林さんでもストリップを見に行くの。」

という感じで、後輩の男性社員の中には普段精密機械のように動いている人が人間味を見せた、という同情論が多かった。荒川も、大騒ぎした割には元々罪をきせれるような大した問題ではないので、それ以上言及しなかった。

梨絵は、家へ帰る道で何か大事なものを失った人のようにふらふら歩いていた。

そしてアメリカでのことを思い出していた。小林と一緒にディズニーランドへ行った帰り、荒川がホテルで待ち構えていた。打ち合わせは口実で、実は荒川は梨絵をその後市内のナイトクラブに連れて行った。初めて行ったナイトクラブの怪しい雰囲気、身の危険を感じた梨絵は頭が痛いのですぐに帰ると言い、これからだと言う荒川とすったもんだがあったが、結局、荒川が折れてすぐにホテルに帰ったといういきさつがあった。そのために、帰りの飛行機の中でも梨絵は荒川とあまり口を聞かず、帰国後も病気ということで、三日程休んだ。

その間に、荒川は小林を蹴落とす格好の材料を見つけた。それがストリップ劇場へのリムジンの件であった。梨絵は、普段なら小林がストリップショーに行ったくらいでは動じないが、ナイトクラブの件があったために、とても敏感になっていた。自分とディズニーランドに行った二日後に、女性の裸を見に行くなんて、小林もやはり所詮はだらしない男であったか、という気持ちになってしまった。そして、もはや会社に残る理由もなくなったのではと思い始めた。

次の週、東京でA I C A D ジャパン社長歓迎パーティーが行われ、T E Sからは荒川社長と稲垣営業部長とが招待された。二人が話している所に、中田幸吉が歩いて来た。中田は、にこにこしながら

「よう」

と手を上げた。

「この間のアメリカ旅行では、荒川社長もツアーとは別に来られたんですね。私が、御社の小林君と部屋が一緒やったの、ご存知でした？いやあ、彼はすばらしいエンジニアですね。何でもよう知ってるわ。おまけに、英語もペラペラですごいんですねあ。」

荒川は、この灰汁の強い中田を避けていたが、守山引き拔きの件もあったので、冗談とも皮肉とも取れることを、作り笑いで言った。

「うちの社員を、あまり誘惑しないでくださいよ。」

中田は、急にしかめっ面になり、

「あほなこと言わんといてえな。守山君のこと言うてるんでっしゃろ。あれはね、本人の希望をうちが受け入れたまでや。なんやったらいつでもお返ししまっせえ。」

そして、勢いついたのか、酔っぱらっていたのか、中田はさらにおかしなことを言った。

「小林君には、今回いろいろ協力してもらったのでお礼を言わせてもらいます。」

稲垣が、いぶかしげに訪ねた。

「あの、うちの小林が、なにか御社に協力したのでしょうか？」

中田は急にハッとしたような顔になり、

「いや、いや、アメリカでいろいろお世話になったということですがな。」

とごまかした。荒川は、目をしかめて中田を見た。中田は、昨日のことを思い出していた。

中田興行の会議室で、中田と守山が話していた。

「守山君、小林君と会ってるところを、うちの社員が見た、言うてたで。またなんで、小林君と会うてたんや。」

守山は、こういう質問に対しては、機転が利かないタイプで、ひたすら黙っていた。中田は、誘導尋問をした。

「どや？前の会社に戻る相談とちやうんか？そうやったら、それでもええねんで。」

守山は、この言葉にはさすがにあわててしまい、まんまと中田の罠にはまってしまった。

「実は、昔自分が作ったソフトのことで、ちょっと小林に聞いてました。」

「なに聞いてたんや。」

「作り方忘れてたんで、昔、自分が作ったプログラムをちょっと見せてくれ言うて。」

中田は、わざと大きな声を出した。

「あほか、お前のしているのはスパイ行為や。小林と会ってるのを見てたのが、うちの社員やったらからまだよかったけど、T E S の社員に現場を押しえられてみ、わしらの会社が訴えられるとこやで、そんなこともわからんのか。」

守山は恐縮し、

「すみません。」

と言って頭を下げた。中田は守山が辞めても他に行くところがないのが分かっていたので、強気だった。

「おまえ会社辞めるか？」

目を細めてゆっくりと言った。中田は青くなり、あわてた。

「それは困ります。」

そう言うのが精一杯だった。

「ええか、よう聞きや、辞めたなかつたら小林を引き抜くんや。」

守山はびっくりして、自分の代わりに小林を入れるのではと考えた。

「ぼくは、どうなるんですか？」

中田は、「ふん」と鼻で笑い、完全に守山を舐め切ったように話した。

「お前は今の通りや、心配すんな。小林君は、うちに新設する国際部の部長になってもらはんや。ただし、3ヶ月以内にでけへんかったらお前は首や。」

東京から帰って来た荒川は、パーティーの時に中田が言った言葉が引っかかっていた。なにか中田と小林の間で動きがあると睨んでいた。たぶん、中田は小林を引き抜くつもりではないか。小林は煙たい存在であり、いっそいなくなったほうがせいせいするのだが、取引先に信用のある小林が辞めると、会社として打撃が大きい。

もう一つの問題は、小林の後を継げるエンジニアが誰もいないことだった。町田はそれなりに知識があるが、若さもあって知識が偏向しており、客先に一人で行かせるには、不安材料がある。要するに、客先で何を言い出すかわからないという問題がある。新入社員は、まだまだ使いものにならない。他社から引き抜くにしても、C A D そのものが新しいため、C A D の専門家を引き抜くのは難しいだろう。どちらにしても、長いトレーニング期間が必要になる。

どうしたものか？さらに荒川はもう1つ悩みを抱えていた。昨日、梨絵が帰った後で、梨絵の机の引き出しから、まだ出していない辞職願を見つけたのだった。

しばらくして、荒川の頭に、この2つを一挙に解決する方法が、はたと閃いた。梨絵が

普段からCADに戻りたいと言っていたので、梨絵にCAD技術課長を兼任させる。そして新たにCAD技術部の中に海外事業課を作り、小林を部下のいない課長にする。海外折衝に回るという名目で、現在小林が持っている客先の仕事を、徐々に梨絵や新入社員に引き継いでいき、最終的には客先の担当からはずす。荒川は、回りくどいやり方だが、これが一番の近道ではないかと思った。

丁度その時、梨絵が外出から帰って来た。梨絵はずっと辞職願を出すタイミングを計っていた。そして、今日こそは引き出しの中から辞職願を取り出して、社長に辞めることを宣言しようと思い朝から緊張していた。梨絵は、自分の机の前まで歩いて来ると、立ったまま辞職願の入っている引き出しを引こうとした。荒川は、それを横目で見て切り出した。

「梨絵君。」

急に呼ばれて、梨絵は少したじろいで、引き出しから手を離した。

「まあ座りたまえ。大事な話があるんだ。」

梨絵は、タイミングをはずされ、ふらふらと椅子に座った。

「僕は、君をCAD技術部の方に返そうと思っている。」

そう言って、わざと間を置いて、梨絵の様子を見た。梨絵は、

「えっ」

と言って、不思議そうな顔で荒川を見た。

「いや、社長室長もしばらく兼任してもらおうが、CAD技術の人数が減っているんで、君に助けてもらおうと思ったんだ。どうかね。」

梨絵は、突然のことで判断できず、じっとしていた。

「あと、これは、誰にも言ってもらっては困るんだが、実は小林君のことなんだが……」小林のことで、なにか重大なことを言うのではと、梨絵は少なからず緊張した。荒川は、ねちねちと梨絵に念を押した。

「これは、小林君に内緒だよ。友達でも言っただけいけないことがあるのは分かるだろう。」梨絵は小さくうなずいた。小林に愛想をつかしたと思っていた、どこかで小林のことが心配であった。

「実は、小林君が他の会社の者と通じているという噂がある。」

荒川は細切れに言って、梨絵の反応を弄んでいた。梨絵は、まさかというような顔をして荒川を見た。

「いや、確証はないんだが、社長ともなると噂でも無視できなくてね。まさか君はその事を知らないだろうね。」

梨絵は驚いた顔のまま、

「いえ全く知りませんし、あんなに会社のために尽くしているのに、何かの間違いだと思えます。」

「いやに肩をもつじゃないか。」

と言って笑った。

「いや、僕はそのことを追求しようとしてるんじゃないんだ。むしろ、小林君に同情している。たぶん、その噂は小林にやっかみを焼いている奴が流しているんだろう。そこで、僕はこの際、小林君を年相応の役職につけたいと思っているんだよ。彼は英語ができて、これから海外の折衝が増えるから海外事業課の課長に推薦しようと思っている。どうか



ね。」

梨絵は、小林の気持ちをよく知っていたので小林に代って発言した。

「でも、小林さん、ふだんから技術をもっと磨きたいと言ってましたから、喜ばれるかどうか？」

荒川は、少し声を大きくした。

「なに言ってんだい。海外事業課は、C A D技術部の中にあるんだよ。海外の技術をいち早く取り入れるためのものじゃないか。この間のアメリカ出張で言ってたことを実現するように配慮したつもりだがね。僕は、君も当然喜こんで賛成してくれると思ったがね。それとも、あれかい、やはり噂通り彼は会社を辞めて、他所に行った方がいいというのかい。」

荒川は、そういうへ理屈を振り回して、梨絵を混乱させた。梨絵は、小林のためならと思ひ、結局賛成し、自分の辞職の話も保留にした。

それから数日後、小林の海外事業課、課長の辞令は小林に何の説明もなく突然下された。そして梨絵のC A D技術課長兼務も同時に辞令が出た。梨絵は、C A D技術に移るのは知らされていたが、まさかC A D技術課長になるとは思っていなかったので、少なからず驚いた。

小林には辞令の後、澤田部長から業務内容の説明があったが、小林は何か作為的なものを感じ、今更いやだとは言えない状況だったので、黙って説明を聞いていた。説明を聞いている小林の顔は、少なくともうれしそうなものではなかった。なにか自分を取り巻く巨大な罟が仕掛けられたような、怪しい気持ちになっていたが、ただ、こういう時はじたばたせず、なすがままに任せるとというのが、小林の人生経験から出た答えであった。

「何があっても、死ぬよりましだろ。」

というのは、苦しいとき彼がいつも口にする言葉である。その夜、小林の家に守山から電話がかかって来た。

「小林さん？こないだは、プログラムもろてすまなんだ。」

「いえ、ただうまいこと動いたかな？」

「おう大丈夫やった。」

そしてしばらく沈黙がつづいた。小林は電話口から聞こえてくる息遣いを聞きながら、この間のお礼だけの電話だけではないと感じた。沈黙がずいぶんと長く感じた。

「あんな、うちの社長から頼まれたけど、うちで働けへんか。」

普通の人ならもっと器用なものの言い方をするのだが、守山はこう言うのが精一杯だった。小林は何があっても、中田の下で働くのはいやであった。ただ、守山にもいろいろ事情がありそうなので、断り方を工夫する必要があるあった。

「自分を買ってくれてありがたいけど、今回、海外事業課の課長になったとこで、仕事を辞めるわけにいかんねや。」

「えっ、課長になったんか？そうか給料上がったんか？」

「いや、給料の方はたいしたことはない。ご存知のように、残業手当てがなくなるから、実質はマイナスやな。」

「そやろ！」

守山にしてはタイミングのよい相槌を打って続けた。

「うちの社長がな、今の倍の給料出すいうてるで、それで国際部の部長や。」

そこまで一気にしゃべった。小林はどっちみち断るつもりなので、思わせ振りの言葉を言わない方がよいと思った。

「わるいけど、やっぱり断るわ。僕にも考えがあるんで。」

「俺がこんなに頼んでもか？」

小林は小さく、

「ああ、すまんけど」

と言って、守山が電話を切るのを待った。再び息遣いだけが聞こえる沈黙が続き、プツツと電話の切れる音がするまで随分長く感じた。

海外事業課の最初の仕事は、小林の仕事の引継ぎであった。大阪機械をはじめ、今まで自分が担当していた客先に、梨絵と新入社員1、2名を連れて回るというパターンで、小林が海外担当になったことを告げた。今後、小林の代わりに梨絵のスタッフがサポートする、ということを説明し、小林は同じ部署にいたので、何かわからないことや、緊急の問題があれば、その時は、小林がカバーすると言って客先を安心させた。

ある日、小林が客先から帰ってくると、町田が血相を変えて小林にたずねた。

「今大変なことになってるの、知ってます？」

小林は

「いや」

と言って頭を横に振った。

「朝来た郵便で、受付が封筒開けたら、フロppyが入ってたんですよ。「誰に来たんやろう」言うて、新人がそのフロppyをPCに入れて見てたら、プログラムと文章のファイルが入ってて、文章ファイルの方に、小林さんの名前が書いてあったんですよ。」

小林は、まさかというような顔をして、町田にたずねた。

「僕の名前で、何が書いてあったん？」

「小林さん、プログラム送ってもらってありがとうございます。」

みたいな感じで。

「それで、送り主の名前は？」

「書いてなかったと思いますけど。」

町田は、かなり深刻な事態になっている、というように、普段のひょうきんはなく、目が充血して、沈痛な面持ちだった。

「僕が最初に見つけたら、先に小林さんに相談してたのに、新人が見つけて、皆でさわいで、部長に報告したから、大げさな問題になってます。」

小林は、誰がそんなことをしたのかを考える前に、この事態にどう対応するかを考えるのが先決だと思った。小林は、両手で拳を作り、力込めて気合を入れ、考えた。

澤田が、梨絵と小林を応接室に呼んだ。決定的な証拠を握ったベテラン刑事が、犯人の取り調べを開始するような感じで、余裕の澤田は、タバコに火をつけ、わざとらしい、やさしい笑顔を造り、ソフトな声で言った。

「小林君、このフロppyに見覚えある？」

まさに守山に渡したフロッピだった。小林はここに来る前に、こうゆう事態を想定してはいたが、さすがに、証拠のフロッピを目の前にすると、混乱してしまった。耳まで真っ赤になった。また、自分が混乱している表情を、澤田がにやにや笑って眺めているのも気になり、益々頭が混乱していった。

ただ小林はこの会議に臨む前に、ある程度の方針は決めていた。先ず、どんなことがあっても、守山や他の人の名前を軽々しく挙げないこと。次に、フロッピ内にあるのは、自分が書いたプログラムであって、会社のコピーではないということを証明すること。そして、最後は、会社を辞める覚悟をしておくことであった。

梨絵は、小林の隣に座っていたが、ときどきチラッと小林の横顔を窺う程度で、終始うつむいて黙っていた。小林の返事が遅いので、澤田が鼻で笑いながら言った。

「どうですか？」

小林は

「ええ。」

と言って、しばらく間をおいてから話し出した。

「確かに私のフロッピです。これは、会社とは別に雑誌に投稿しようと思って作ったプログラムで、紛失していたものです。この内容は、調べていただければわかりますが、会社のプログラムとは全く関係ありません。」

小林の苦しそうな弁解に、余裕の澤田は刑事コロンボのように右手で自分の顎をなぜながら

「じゃあ、このメモはどういう意味だね。」

と言って、フロッピの中に入っていたメモファイルを印刷した紙を小林と梨絵に見せた。そこには、送り主の名前も日付もなく、ワープロで、

「小林君ありがとうございました。」

とだけ書いてあった。澤田が言った。

「小林君、ありがとうというからには、君が誰かに渡したんじゃないのか？」

「いえ」

小林は首を横に振ったが、自分でもおかしいくらい恐縮していた。これが、本当に渡していなかったら、きっと、もっと堂々と自分の正当性を主張したのに違いないと思うと、自分は、年を取っている割には嘘の一つも堂々とつける度胸がないのか、と情けなくなった。

澤田は、含み笑いをして、完全に時代劇のお代官様になっていた。

「まあ、内容はこれから調べさせてもらうけど。会社のものだったら大変なことだよ。はっきりしたことがわかるまで、社内だけで働いてもらう。しばらく取引先に行くのは、遠慮してもらってね。」

と、何か、はじめから決定されていたように、スラスラと話した。

小林は、部室に帰ってきてからもしばらく放心状態でいた。梨絵が心配してお茶を入れてくれた。そのとき、梨絵は皆に見えないように、小林にメモを渡した。メモには、  
「今夜、10時ころお家に電話していいですか？」

と書いてあった。

小林は梨絵の目を見て小さく頭を縦に振った。梨絵は、今まで小林の自宅に電話したことがなかったが、逆に小林から自宅に電話をかけてもらえば、家族の誰かが出る可能性がある。特に、兄が実家に時々遊びにくるので、兄が出れば話がややこしくなる。そのような事情を考えて、自分から小林の家に電話することにした。

「あの、私今、外の公衆電話でかけています。」

梨絵が、家の近くの公衆電話から小林に電話した。小林も電話を待っていた。

「いろいろご迷惑をかけてすみません。でも、これは僕の問題ですから、僕が解決つけます。」

梨絵は、小林が他人行儀なので少しがっかりした。

「何か事情があるように思うのですが、あの、私は、友達として電話しています。今まで、皆で助け合ってきたのですから、何でも相談してください。お願いします。」

小林は、梨絵の申し出に感謝しながらも、守山の名前は誰にも言うわけにいかないと思っていた。守山のことが確信のことであるので、結局何も話すことがなかった。小林はしばらく黙っていて

「わざわざ電話してくれてありがとう。ほんとに感謝しています。あのフロピを送ってくれた人には心当たりがあるのですが、想像で言うのはよくないので、梨絵さんにも言えません。」

梨絵は、複雑な事情があるとは理解しながら、なんとか小林を助けたかった。そして梨絵にしてはかなり思い切ったことを言った。

「もしかして、中田さんと違います？ね。そうでしょ。」

小林は、梨絵が大胆な発言をしたのでびっくりしたが、中田という推測は間違っていると思った。

「いや、それはないと思うけど。」

と小林が言うと、梨絵は、自分の考えを早口で言った。

「私が思ったのは、守山さんか、中田さんと思ってたんですが、守山さんだったら「小林君」と言わずに「小林さん」っていうでしょ。」

小林は「あっ」と思った。確かに守山なら手紙で書くときでも、「小林君」とは書かず、普段言っているように「小林さん」と言うだろう。まさか中田が？だとすれば中田がなぜフロピを送り返して来たのか？

小林は、電話をかけながら考え続けることができなかった。

「梨絵さん、悪いけど、今日は一人で考えさせて。明日また、こちらから電話するから。」外は木枯らしが吹いて、梨絵は寒さに震えながらも受話器を握りしめていた。

「あの、私の家にかけてもらおうと、誰が出るかわからないので、こちらかまた電話します。小林さんこれだけは信じてください。私は、これからもずっとあなたの友達です。このことは、どんなことがあっても変わりません。」

小林は、電話を切ってから、中田が犯人の場合を想定して考えてみた。

「こんなことをして、彼に何の得があるんだろう。このことで僕が会社を首になって、それで中田興業に転職すると思っているのだろうか？」

小林は、たとえ会社を辞めさせられたとしても、中田興業に入る気にはなれなかった。

そして会社を辞めたあとの身の振り方を考えようとしたが、彼の頭はそこまで飛躍して次のことを考えることができないほど一杯になっていた。

翌日澤田部長は梨絵と町田を会議室に呼んだ。

「君たちに頼みがあるのだが、例のフロップの解析をしてほしいんだ。いや、社長は外部の専門家に鑑定してもらったらどうか、と言っていたのだが、私はあまり外部にこのことを知られたくないんだよ。君たちは小林君の友達で、やりにくいかも知れないが、ここは何とか、会社のために本当のことを知らせてほしいんだ。」

澤田はそう言って一旦話を止めて、梨絵と町田を見た。2人とも元気がない、重々しい表情をしていた。

「まあ、君らの気持ちもわかるが、具体的な作業としては、このプログラムが何のプログラムかということ。そして会社のプログラムとの関わり、要するに、どこまで会社のプログラムがコピーされているのかということだね。

後はこのプログラムを書いた者が本当に小林君かどうか、ということ。いいかね厳しいようだが、うそをついたり、彼に遠慮したりしちゃいけないよ。ここは是非会社にロイヤリティーを尽くしてくれたまえ。」

梨絵が静かに

「わかりました。」

と返事をした。

梨絵にとって他の者が調べるより、自分と町田が調べた方が、小林にとっても悪いことにならないだろう、と判断したからだった。

社外機密の問題であり、部室で作業するわけにはいかなかった。梨絵と町田は、社長が出張中ということもあって、社長室でプログラムを解析することになった。

しばらくして町田が言った。

「さすがは小林さんですね。彼のプログラムは、コメントが詳細に書いてあるという特徴があるのでわかるんですが、今見ている限りでは、会社のプログラムは使っていませんよ。ただ、プログラムそのものがベーシックなもので、アプリケーションと言うよりどちらかと言うと、ユティリティーで、マクロに近いものですよ。」

それを聞いて、梨絵は少し安心した。

そして最終的に、梨絵は町田の解析とおり澤田に報告したその晩、梨絵は再び小林に電話をした。

「あの、澤田部長に言われて、私と町田さんとでプログラムを見たんですけど、会社とは関係のないプログラムだということがわかったので、その様に報告しました。」

「わざわざ電話ありがとう。でも、それにしても会社に迷惑かけたことには変わらないから、僕は辞職願いを出そうと思っています。」

梨絵は、小林がそう言うのではないかと想像していたが、それでも何とか思い留める方法はないかと必死で考えた。

「小林さんは、辞めてどうされるんですか？」

「まだ何も考えていません。この2年間走り続けて、あまり休んでいなかったもので、しばらく休んで、ゆっくり考えてもいいかなと思っています。」

梨絵は公衆電話の受話器を持ちながら、片一方の手で涙をぬぐっていた。外は真っ暗で霧雨が降っていた。

「小林君、解析の結果、会社のプログラムをコピーしたものじゃないということはわかったけど、じゃあ、これは何のために送られて来たんだね。」

翌日、会議室で、澤田部長が小林に聞いた。

「さあ、私にもわかりません。」

覚悟を決めている小林には、長い言い訳をする気持ちはなかった。そして、不思議と澤田もそれ以上追及しなかった。小林が、ころあいを見計らって澤田に辞職願いを出すと、澤田は驚いた様子もなく、

「とりあえず預かろう。」

と返事した。

それから2、3日した師走のある日、小林の辞表は受け入れられた。ただ、まだいくつか引き継ぎが残っているということで、年内一杯は会社で働くことになった。

小林は特に変わった様子もなく毎日引き継ぎ作業を行っていた。ある日、国際郵便が小林の机の上に載っていた。オーストラリアに行った君江からであった。とても懐かしく思い封を切った。

「小林さん、町田さん、梨絵さんお元気ですか？長い間お手紙を書かなくてすみません。私は、今シドニーで働いています。最初はワーキングホリデーと言って、3ヶ月間のアルバイトだったのですが、今回、正式に雇ってもらうことになり、ビザもずっと働けるワーキングビザを取ってもらうことになりました。

こちらは日本と違い、真夏のクリスマスで、何もかも日本と逆さまです。初めてということもあって、とてもわくわくしています。働く環境も日本と違い、とてもおおらかな所です。ぜひ一度遊びに来てください。」

小林は読み終わって、さすがは君江、頑張っていると感心した。

そして、会社を辞めた後オーストラリアをしばらく旅行するのも悪くないと思いはじめた。

1987年12月25日をもって小林はT E Sを退職した。

## 第七話 オーストラリア旅行

1988年1月も終わろうとするころ、小林はオーストラリア、シドニー行きの飛行機に乗っていた。君江には退職した事情を知らせて、そちらに遊びに行ってもよいかと打診したところ、是非来てくださいという返事をもらった。

それから、すぐにチケットを買って飛び出したという感じである。ひとつには、中田の執拗な誘いの電話から逃れたかったという事情がある。

オーストラリアは、サマータイムといって、夏に限り通常的时间より1時間先にすすめる時間を採用していた。従って、通常は日本時間より1時間早くなるのが、2時間の差があった。それでもアメリカなどと比べると時差ぼけがなく、現地で時間調整をする必要はなかった。

日本の冬がオーストラリアの夏で、季節が完全に逆転する世界。月が反対側から欠けていく世界。唐詩選で、同時に巡り遭わない例えに歌われた、参と商（オリオン座とさそり座）がオーストラリアでは同じ空に出るといふ不思議を楽しみにしていた。

夜間飛行のため、朝になるまで外の景色を見ることができなかった。

小林は殺虫剤の匂いで目を覚ました。ちょうどスチュアーデスが、両手に殺虫剤のスプレーを持って、上の荷台あたりにシューと派手に吹きかけながら前から歩いてくるところであった。オーストラリア大陸は、長い間他の大陸から切り離されていたため、オーストラリアならではの環境が今でも多く存在している。その貴重な環境を守るため、他の大陸から虫一匹入り込むのを警戒しているのだ。窓を開けると朝の光の中に広大なオーストラリア大陸が広がっていた。山がちな日本の景色とくらべて、オーストラリアは、平らで砂漠のような景色がずっと続いていた。

小林は商社時代からインド、東南アジアなど人口密集地帯を渡り歩いていたので、人口密度にして日本の60—70分の1という、人がまばらな国というのはどんなものなのか、実感が湧かなかった。要するに、電車の中に70人いるのが1人になる世界である。シドニーエアポートでは君江が迎えに来てくれることになっていた。

「やあ、元気！」

税関検査が終わって、荷物が入ったトローリーを押しながら出迎え客の待つ到着口に出たとき、遠くから君江が小林に声をかけた。君江は黄色地に緑の横じまが入ったオーストラリアンカラーのTシャツにジーパンというカジュアルな服装だった。横に同じ年ころの金髪男性を連れていた。

「わあ、小林さんお久しぶりです。」

そう言って、いきなり小林の肩を両手で押さえて、頬にキスをした。小林は、そういう西洋の習慣を知っていたが、日本人同士だと、なんとなく恥ずかしく、赤く頬が染まった小林からは握手で返した。

君江は、横の男性を紹介した。

「ボーイフレンドのボブ。」

長身でまだあどけなさの残るボブがうれしそうに握手を求めた。

「**How do you do?** (はじめまして。)」

そしてボブの車でひとまずホテルに連れていってもらうことにした。ホテルは、シドニー市内の中心地、タウンホールにあるビジネスホテル、「コアラホテル」を取ってもらっていた。

空港から市内へは車で30分ほどで、途中、初めてのシドニーの景色を見ながら走った。オーバーコートを着ていた所から飛び立ち、半袖で、太陽のまぶしい真夏のシドニー。街を歩く人の表情がとても明るく見えた。助手席の君江が振り向いて、ボブにもわかるように小林に英語で話した。

「**We booked your hotel today. But please stay in our home tomorrow.** (今日はホテルを予約してるけど、あしたは、我が家で泊まってください。)」

君江の英語はとても流暢で小林はびっくりした。

「**Thank you for your offer. But I'd rather stay in the hotel. Because I want to walk around in my underwear.** (ありがとう。でもホテルの方が気楽で、下着でうろうろしたいもんで。)」

と返事した。ボブが

「**You speaks very good English.** (英語がうまいね。)」

と運転席から指でOKマークを作った。

ホテルに着いたが、チェックインが夕方からとのことで、荷物だけ置いて3人で街に出た。シドニーの街の特長は、まず、アメリカと違って町を安心して歩けるということ。世界各国からの移民が集い、アジア系の移民も多く、ぼやっとしていると外国にいることを忘れてしまいそうになること。すべての人種がシドニーに馴染んでいて、日本でいう外人がここにはいなくて、どんな人でもシドニーの住人に見えること。そして人々の表情がとても明るく、通り過ぎていく人の多くが笑いながら歩いていることだった。

次の日、小林は君江とボブの会社を訪ねた。

会社はシドニーのビジネス街、ウィンヤード駅から歩いて数分のところにある高層ビルの9階にあった。マコーリー、テレコム、システムズ (**Macquarie Telecom Systems**) という、電話サービスを含む通信、コンピュータサービス会社であった。従業員は200名近くと、産業の少ないオーストラリアとしては大会社に属している。

受付で、小林は君江を呼んでもらった。出てきたのはオーストラリア人の中年男性で、頭の毛がうすく、小太りで陽気な人だった。

「**Hi mate, I'm sorry Kimie is out now. She will be back soon.** (こんにちは、君江は外出中ですが、すぐに帰ると思いますよ。)」

小林が

「**Is Bob there?** (ボブはいますか?)」

と尋ねた。その男は少し上を向いて考えてボブが誰か分かったようで。

「**You mean Kimie's boy friend. He went out too.** (ああ、君江のボーイフレンドね。彼も外出中だね。)」



そう言った後、

「**My name is Peter Moore.** (私の名前は、ピーター、ムーアです。)」

と握手を求めて来た。

「**I'm Takeshi Kobayashi.** (わたしは、タケシ、コバヤシです。)」

そしてその男は手で招いて

「**Come with me, Takeshi.** (たけし、こっちに来て。)」

と言って、小林を中に案内した。

社内のレイアウトは、日本とは違い、大きな部屋の中に、一人ずつ顔が隠れるくらいの高いつき切りがしてあり、マネージャー用には、つき切り壁の個室があった。小林は、一番奥の大きな個室に案内された。

「**Takeshi, what would you like to drink?** (たけし、飲み物は何がいい?)」

小林は恐縮したが、日本と違ってはっきりと飲みたいものを告げるべきだと思い、

「**If possible, coffee please.** (できれば、コーヒーをください。)」

とリクエストした。すぐに

「**What would you like to have in your coffee?** (砂糖とミルクは?)」

と聞かれ、

「**No sugar and milk please.** (砂糖なしのミルク入りで) **Thank you Mr. Mr.** えーと」

と苗字を忘れてしまった。

「**Call me Peter!** (ピーターと呼んでください。)」

とにっこり笑い、ピーターは、自分でコーヒーを入れに行ったようであった。日本であれば女の子を呼んで入れてもらうところであるが、さずが男女同権の先進国、オーストラリア、すべてセルフサービスのような雰囲気であった。ピーターと君江の音が遠くから聞こえ、君江が部屋に入って来た。

「小林さん出かけていてすみませんでした。でももう社長とお会いになってるんですね。」

「えっ！」

小林はコーヒーをこぼさないようにすり足で歩いてくる善良そうなピーターがまさか会社の社長とは思わなかった。ピーターは小林の前にコーヒーのマグカップを置くとすこし机にこぼれたのかあわててティッシュを取り出してこぼれたコーヒーをふき取った。

小林は初対面でしかも社長に対してピーターは失礼だろうと思い、君江に日本語で聞いた。

「社長さんの苗字はなんだったけ？」

君江は笑って

「ピーターでいいわよ。ね、ピーター。」

日本語で何を言っているのかわからないので返事に困っている善良なピーターを見た。

ピーターも雰囲気でおよその見当がついたようで、

「**No worries.** (心配しないで。)」

とにっこり笑った。

それから、君江に社内を一通り案内してもらった。皆、気さくに小林に声をかけ、冗談を言い、とても明るい社内だった。

従業員は、上から下までファーストネームで呼び合い、日本ではよくある女性のお茶く

み習慣がなく、自分で客の飲み物も作り、コピーなどの雑用も、すべて自分でするようであった。

日本の会社は、総じて大部屋で端から端まで丸見えで、常に監視されている雰囲気があるが、この会社は、個人個人の席が衝立で仕切られ独立している。そして、日本のような上下関係による緊張が少ないように思えた。

ランチタイムに外へ出て、カフェで昼食を取りながら小林はうれしそうに君江に話した。「どこの会社も、こんな雰囲気なんですか？すごく明るくていいですね。」

君江もうれしそうに

「たぶん、オーストラリア中こんな雰囲気ですよ。」

と答えた。

「一つ聞いてもいいですか？」

「ええどうぞ。」

「社長をピーターって呼びにくくないですか？」

君江はパスタを口いっぱい入れていたので、ちょっと待ってねというジェスチャーをした。

「ごめんなさい。のどに詰まって。ええ、最初のうちはとても言いにくかったけど、慣れたらなんともなくなっただわ。この国は移民の国だからみんな平等という気持ちがなによりも大事なの。もちろん職務上は上下関係があるけど、それは仕事をする上で必要なことであって、人間の区別じゃないでしょ。たとえば、ほら、ここでタクシーに乗るとき一人だったら助手席に乗るの知ってる？」

小林が「えっ」という顔をした。

「タクシーの運転手と自分とは平等だということだと思うわ。」

「それじゃあ、僕は、今日ここに来るときタクシーの後ろの座席に座ったけど、失礼なことをした訳だな。でも、日本では、お客様は神様だという言葉があるくらい客を大事にする習慣があって、これはこれで、商売には大事なことだと思うけど。」

「オーストラリアでは、客もサプライヤーも平等よ。日本では、客が威張って必要以上に偉そうにすることがあるじゃない。小林さんこれどう思われます。」

そう言われて、小林は黙ってしまった。客は神様という考えは商売上の知恵という程度のもので、極端に言えば、お金をもらうために腰を低くしたほうが有利だと言っているに過ぎない。人は平等であるという太極から見て、確かによい習慣と言えるかどうか疑問だと感じた。

「まだオーストラリアに来たばかりで、あまりよくわからないけど、日本で当たり前だと思っていたことが、ここに来て差別だと感じるようになるんだね。」

君江が、パスタと格闘しながら言った。

「小林さんは男性だから、考えたことがないでしょうけど、日本は女性に対する差別がたたくさんあって、オーストラリアで働くことによって、それが一々分かってくるのね。」

「例えば？」

「例えば、日本で女性で役職に就いている人は少ないじゃない。ここは、だいたい上から下までの役職で、男性と同じ数の女性がいるわ。」

「日本だったら女性は、結婚したり、子供を生んで育てるために会社をやめる人が大勢いて、多分それが会社にとってネックに思われて、男性の方を採用するんじゃないかな？」

当て推量で小林が言うと、君江の目がキラッと光った。

「やっぱり小林さんは男性ね。日本の女性に対する差別はそんな単純なものじゃないわ。もっと根源的な性差別だと思います。極端に言うと、「女は子供を生むための道具」くらいに思っているじゃないですか？」

「それはどうかなあ？」

君江は興奮して来た様子で、手が中に浮いたまま、フォークからパスタをだらりと垂らしたまま、しゃべった。

「例えば、日本企業でよく女性従業員を「女の子」と呼ぶじゃないですか？これは女性にお茶くみをさせたり、使い走りに使うための差別語じゃないですか？あと日本ではよく残業しますが、女性は夜道の安全性とか、家の仕事があってそんなに遅くまで働けないでしょう。男性はそれを知っていて、女性が仕事を一人前にできない理由にするんだと思います。昼間ゆっくりして、残業して稼ぐという悪習慣が染み付いているのがわかってないんです。」

「ここじゃどうなんですか？」

「ここは、ほぼ全員定時に帰ります。残業する人は能力がないとみなされ、査定が低くなります。ただ」

と言って君江はすこし自分で興奮を収めるように座り直した。

「ただ、日本ほど仕事がないのも事実ですけど、でも、たぶん日本の女性がここに来たら絶対に全員こっちのほうがいいって言うと思います。」

それからさらに会話を交わしたが、君江はよほど日本で差別されていたのであろう、日本のことは何もかも嫌いになっているようであった。そしてこの国が自分を救ってくれたと言い、できることならここで永住したいと言った。小林はオーストラリアに着いたばかりであったが、君江ほどではないが、自分が考えていた理想に近い状態がこの国にあるのを感じていた。

振り返ってみると小林も日本では年齢や学歴や、さまざまなことで差別に遭い、それを一つ一つ乗り越えていくという、戦いの連続であった。最初からこの国に生まれていれば、違う人生を歩んでいたかもしれない、と思ったが、でも、人生にIFはないということを思い直し、今からどうするかを考えようとした。君江が、最後に思い出したように言った。

「小林さん、そう言えば会社辞められたんでしょ。すみません、自分のことばかり言って。」

小林は、急に自分に矛先が向けられたので、照れてしまったが、すこし間をおいて話し出した。

「まあいろんなことがあって、結局辞めたんですが、独身の気軽さでしばらく旅行して、これからのことを考えてみようと思っています。」

「小林さん、全然変わっていませんね。」

静かに笑った。

「えっ、どういうことですか？」

「小林さん、昔から人の悪口を言わない人だったから、わたしがどんなことがあって辞めたのか聞きたいと思っても教えてくれないでしょうね。」

小林もとぼけて

「たぶんその辺の事情は、町田さんに聞くとよくわかるのではないのでしょうか？」

そう言って、2人とも嘖き出して笑った。

「僕は、これからシドニー以外の都市も回ってみていろいろ見てみることにします。問題は、他の都市に君江さんのような友達がいないので、単なる観光になってしまうような気がします。」

君江が人差し指を立てて、元気よく言った。

「大学に行ったらどうでしょう。オーストラリアの大学のほとんどは日本語を教えていて、日本に興味ある人がたくさんいますから、相手になってくれると思いますよ。ちょうど新学期が始まったばかりですから。」

「なるほど、それもいいですね。じゃあさっそく、今からでも手始めにシドニーの大学から回ってみることにします。」

小林は、昔インドに留学したころを思い出した。インド中を一人で旅した時も、確かにその都市にある大学のキャンパスに行くと、休みのときでも誰かうろうろして話しかけてくれた。情報にはこと欠かないであろう。

昼食後、一旦会社に帰って社長に挨拶し、君江にまだ帰って来ていないボブによろしくと伝えた。お金をセーブするためにも家に泊まっていったら、という君江の申し出も丁重に断って、シドニーを発つ前には連絡するのでボブも一緒に食事しましょうと提案した。

そして一人で大学のキャンパスに向かった。

3日後、小林は夕方の飛行機で首都キャンベラに行くことにした。当日の朝に最後に昼食でも一緒にと君江に電話した。

君江は気を効かしてシドニーのチャイナタウンの飲茶レストランを予約してしてくれた。レストランは、昔、日本のデパート最上階にあった大食堂を思い出す大きな部屋に、丸テーブルが並べてあり、その間を飲茶料理を積んだトローリーが行き来していた。しばらく待っていると君江とボブが現れた。

「**Sorry for being late.** (遅れてすみません。)」

ボブは自分がいると会話が英語になるので、

「**I will focus on eating. Please speak in Japanese.** (僕は、食べる方に専念しますので、日本語で話してください。) どうぞ」

と、どうぞだけ日本語で言って、にっこり笑った。

君江が

「なんか、昔のこと思い出しますねえ。ほら4人で初めて道頓堀のなんとかいう中華料理店に入ったでしょ。」

「梁山泊。ん、あのころ僕らは会社に入ったばかりで、これからどうなるんだろうという不安だらけだった。」

「そう、そこでみんなで自分の過去を語り合っただけで心が一つになったんですよね。」

「ほんとに、得難い仲間です。」

小林は懐かしむように微笑んだ。君江も感傷的になって

「でも、小林さんは会社を辞めちゃって、私はオーストラリアで、皆バラバラになってし

まいましたね。」

「いや、でも、こうやってまた会えたし、距離とは関係ない気がしますよ。地球のどこかに自分と心を通じ合える仲間がいるというのは、それだけでもとても心強くて、ほんとに宝物です。」

君江もしみじみと頷いた。

「ところで、どうでした？大学のほうは？」

「シドニー大学、ニューサウスウェルズ大学、マコリー大学、UTS（シドニー工科大学）に行って、いきなり日本語学科の研究室に飛び込んだのですが、僕が大学時代言語学をやっていたと言うと、歓迎してくれまして。それで、今コンピュータのプログラマーをしていると言うと、こちらのコンピュータで、日本語を打つ方法だとか、日本語教育にどうやってコンピュータを導入したらよいかとか、逆に質問攻めに合いました。」

「よかったじゃないですか。小林さんの得意なところでしょ。」

「ええ、シドニー大学では、非常勤講師にならないかとまで言ってくれたんですが。」

「すごい、すごい。さすがは小林さん。」

君江は興奮してボブに通訳した。ボブはシュウマイの皿を受け取りながらもう一方の手でOKサインを作った。

「でも僕は、母親のこともあってこちらで働く訳にはいけませんが、これからコンピュータがもっといろんな分野で必要になるということが、はっきりしました。それで、僕がすぐにできることで何ができるか考えたんです。なんだと思います？」

君江は頭を少し傾けて考えたが、わからないというように頭を横に振った。

「教育です。」

途端、君江はとても驚いた顔をした。

「えっ？だって小林さんは、CADプログラム一筋じゃなかったんですか？学校の先生になるんですか？」

「違いますよ。日本ではパソコンを持ってるのは、専門家と一部のマニアくらいじゃないですか？今回シドニーで会った人に聞いたら、ほぼ全員自宅にコンピュータを持ってるって言っていました、みんな別にコンピュータの専門でもなくて、たぶんオーストラリアは英語の国で、今までもタイプライターがあったんで、その延長のような感じでパソコンを使っているようですね。でも、日本は手書きの国でしょ、絶対に一般化するまでに教育が必要だと思います。」

「でも、一般の人を教えるんだったら、小林さんほどのレベルは必要ないんじゃないですか？なんかもったいない。」

君江は心配そうに小林を見た。小林は君江が自分を買ってくれているのに感謝しながらも、自分の考えを続けた。

「今までは、インストラクターというのはなんか会社でもプログラムができない社員がちょこっと訓練を受けただけで、スタートできるように思われがちだけど、本来それはよくないと思うんだ。やっぱり、その道の一流が教えて工夫すれば教育だけでも大きな産業になると思うんだ。」

「そう言やあ、そうかも。」

君江は、自分がいつも他の人がいやがるインストラクターをやらされた経験から、イン

ストラクターという職種をあまりよく思っていなかった最後に、君江が変なことを聞いた。「梨絵さんは、小林さんといっしょに辞めなかつたんですか？」

「いや、今や、彼女はCAD技術のバリバリの課長で、辞めるなんてことは考えられないですよ。」

と言うと、君江はなにか言いにくそうに、

「あのそういう意味ではなくて・・・」

と後を濁した。

小林は、その後ホテルに帰り荷物を持ってシドニー空港へ向かった。オーストラリアに1～2週間滞在のつもりが、シドニーを皮切りに、キャンベラ、メルボルン、アデレード、パース、ブリスベン、ゴールドコーストとオーストラリアの主要都市を回ったため通算2ヶ月近く滞在し、1988年も4月に入ろうとしていた。

大阪空港に向かう飛行機の中で小林はこれからのことを決心していた。このオーストラリア旅行では多くのことを経験した。例えばこのコンピュータ技術者は個人経営が多く、会社の規模で仕事をする日本とは対照的であった。日本では個人が仕事を請ける場合は、直接大企業から取ることなど考えられない。下請けや孫請けとして結局縦社会の組織に組み入れられてしまう。仕事を与える人たちの見下したような態度をあえて享受し、卑屈になることを覚悟しないとイケない。しかしオーストラリアでは、平等という基本的な考えが染み付いており、仕事を与える方も請ける方も同じレベルにある。今まで日本の中でもややもやして、息苦しく感じていたものが、ここに来て初めて日本の縦社会の不平等、差別だということがはっきりとわかった。

ただ、問題はこれから自分がどう生きていくのかということだ。自分としてはCADプログラミングがやりたいが、日本ではどこかの会社に入らない限り個人では請け負うことができないであろう。小林の中では、すでに誰かに雇われるより、自分で何かできることをしたいと思うようになっていた。ただ今までのサラリーマン生活で、自分で稼いだという経験がないために、ビジネスの一般常識がなく、営業から始まって集金に終わるというサイクルが今ひとつ理解できていなかった。

「これから何をするのか、それで生活できるのか、そして未来はあるのか。」

朝日が雲間に昇る中、軽く瞑った目の前に光の残像が交錯していた。小林は子供のころからその光を追跡して遊ぶのが好きであった。光はじっと見つめて追いかけていくと逃げていき、あきらめて目を反対方向にずらすと戻って来た。そしてなにかこのことが自分の人生と似ているように思え飛行機の中で目を閉じたままにやりと笑った。

## 第八話 独立

帰国後、小林は早速営業活動に出た。

自宅を事務所にした名刺を刷った。タイトルは「コンピュータ技術者、小林たけし」とだけ書いた。

手始めに大阪市内にある会社を手当たり次第に回ることにした。大阪という街の特徴として、中小企業が多いということもあり、受付を持たない個人会社であれば、門前払いされないだろうと思ったのである。一つには、大きな企業に飛び込む勇気がなかったということもあった。

人情の街大阪と呼ばれるだけあって、飛び込んだ先の対応は小林が考えていた程悪くなく、応接室に案内してもらい、話を聞いてもらったりした。ただ、仕事のことをたずねると、ほとんど決まった取引先があり、すぐには仕事を回せないということであった。その日は20件以上回って目立った収穫はなかったが、初めての営業活動ということで自分を納得させた。次の日も、その次の日も同じように会社回りをしたが収穫はなかった。そして、だんだん小林の中で焦りの色が見え始めた。

一週間何も収穫なく終わった夜、小林は営業のベテランである崎田に意見を聞いてみようと思い立ち、彼の自宅に電話した。崎田の元気そうな声が電話からこだました。

「小林さん、どこへ行ってたん。こっちも小林さん探してたんやで。」

「ああちょっとオーストラリアに旅行してた。」

「ええ身分やないの。そんで今何してんの。」

「個人でビジネス始めたところで、なかなかうまくいかないので困ってる。」

電話口で崎田が笑っているのが聞こえた。

「そら無理や、小林さん、国内営業したことないやろ。」

普通な、自分で独立するときは前の会社の客に何件か当たりつけてから辞めるもんや。そうでなかったらすぐ仕事が入って来るかいな。ほんで今までの取引先は回ったかん。」

「いやそれは、やっぱりよくないと思って。」

崎田は、小林の自信のない声に腹が立ったのか受話器を離しても聞こえるような大声を出してしゃべった。

「何言うてんのな、あんた甘いわ。世の中食うか食われるかないの。わしがこんなこというのも変やけど、うちの取引先とか、小林さんが前に勤めていた商社の取引先とか全部回って見たらどうや。自分のできることを全部やってから考えたらええんとちゃうんか。会社に遠慮する必要なんかないわ。」

小林は崎田の言うのも尤もで自分はずいぶんと甘いと感じた。崎田は、口は悪いが言っていることは尤もなことで生活力があり、相手を元気つかせるパワーがあった。

「会社辞めた人にすぐに開発の仕事出す訳にはいかんけど、うちのやってない仕事やったらお客さん紹介したげるで。小林さんCAD以外に何ができるのんな。」

聞かれて、自分が考えていることを話した。

「いま教育のこと考えてるけど。CADもそうだけど、コンピュータ全般の教育を請け負うかと考えてるけど。」

崎田はしばらく電話口で考えていたようすであったが、  
「場所はどこでやんの。」

と質問した。

「事務所がないんで、僕が出張する。」

と答えた。

「値段は？」

「出張料込みで、一時間5千円くらい考えてるけど。」

「CADの教育やったら安いな。キックバックは？」

「安くしてるから、20%が限度やな。」

「わし小林さんのために言うけど、値段もうちょっと高く取ってもええから、キックバックを30から40に上げたほうがええと思うよ。そやないと担当が動かんで。それで連絡はどないすんのな。」

「明日にでも留守番電話買って、留守のときでも録音できるようにしようと思ってる。」

と答えた。

崎田は元気に

「わかった。任しといてんか。ほんで必ず毎日留守電聞いてよ。」

そう言って電話を切った。

小林は崎田から元気をもらったように思った。以前もそうであったが崎田が「任せとい

て」と言ったことに関しては必ず数日のうちに行動して結果を出した。

くせが強い人物ではあるがとても頼りになった。

崎田の経歴は大学中退ということであるが、本人が言うところでは、中退の理由は、マ

ージャンと女に現を抜かして人生を踏み外したということであった。

TESに就職してからもマージャンと女の尻を追っかける毎日だったが、ある日突然、人生を反省して、これではいかんと思い180度転換したということである。何がきっかけになったのか聞かなかったが長い人生の中でこうゆう転機は大なり小なり誰にでもあるものだと思った。そして反省することが多ければ多いほど溜まったマイナスエネルギーを一気にプラスに転換して、生まれ変わるような気がした。崎田はそのくせのある攻撃性や粘りをもったまま、女の尻からビジネスに方向転換したのだ。

週明けの月曜日の夜に、さっそく崎田から電話があった。

「小林さん、取り合えず大阪機械の関連会社でCADのトレーニングがしたいということがあるんで、明日でも行ってくれる？値段は一時間一万円くらい言うといたから。それで、これは会社と関係ないからキックバックいらんで。」

小林は、崎田から会社の住所や担当者などの詳細を聞き、取り敢えず出向いて話を聞くことにした。出向いた先は、従業員が五百人もいる大阪金型機械という中堅の金型製作会社であった。

担当の清水主任に会うと、話は崎田から聞いていたようで、

「小林さんのことは、親会社からも聞いてます。崎田さんによると今回独立された言うて、

「自分の会社のことはどうでもええから、小林さんをよろしゅう頼んます」言うてました。

崎田さんておもしろい人でんな。」



小林は、崎田にあらためて感謝し、このチャンスを生かせるように両手に拳固を作り、気合を入れた。

清水は小林に尋ねた。

「ここでトレーニングしてもらえるとという風に聞いてますが、受けたいのが十名ほどおるんですわ、どないしたらええやろ。」

「そうですね、CADの場合は一度に2、3人が限度ですね。10名をいっぺんになるとプロジェクタが必要ですね。」

小林は去年アメリカのCADEXで見たプロジェクタによるデモを思い出した。しかし、プロジェクタはスタートしたばかりで値段が安いものでも百万円を超える。

まだコンピュータショー以外にはほとんど使われていなかった。

「小林さんは、持ってないわね。」

清水が独り言のようにこぼした。小林は何か直観があり、清水に尋ねた。

「清水さん、訓練の時間ですけど何時間くらいお考えですか？」

「それは、逆に聞きたいくらいですけど、新入社員がある程度使えるようになるまでを考えています。」

小林は、ここが商売の要とみて慎重に考えながら話した。

「私の経験からいうと、20時間ほしいところです。これ以下だと中途半端なものになると思いますが。」

「確かにそうかも知れませんか。1時間いくらでしたかね。」

「一万円です。」

少し高いかなと思ったが、崎田に言われていた値段を思い切ってぶつけてみた。清水は計算機を持ってきた。

「ちょっと高いわ、もう少し何とかかなりまへんやろか。」

そうやって小林に計算機を見せた。そこには**2,000,000**という数字が並んでいた。なんか桁が1つ多いような気がして小林は清水に尋ねてみた。

「すみませんが、もう一回計算してもらえますか？」

清水は計算機をクリアして、説明しながらキーを押した。

「1時間1万円で、20時間でっしょろ、それで10名掛けたら2百万円ですがな、これなんとか半額になりませんか。プロジェクタ使こうていっぺんにやってもろうてもええんやけど。」

小林は、ビックリして、しばらく自分を落ち着かせるのに時間がかかった。小林の頭の中では1時間1万円は人数に関係なく1万円だと考えていたので百万円でも十分な収入になる。ただ、2名ずつトレーニングしても予算は同じだろうから、ここはなんとか10名纏めてトレーニングする方法がないかと考えた。

小林は、すぐに返答するのをやめ、プロジェクタに関して調べてみることにした。

「ええ、値段的には20時間で百万円でも結構ですが、プロジェクタをレンタルする調査時間をください。いつからスタート予定ですか？」

「いやほんまは来週くらいからでもと思ってたんですけど。」

「わかりました。できるだけ明日までにプロジェクタが可能かどうか返事します。」

それから急いで電器メーカーに電話をして、プロジェクタのレンタルを聞いた。

ほとんどのメーカーが持っているプロジェクタは、ビデオ用でコンピュータ用ではなかった。

あきらめかけていた時、S電器から返事があり、パソコン用プロジェクタの試作機を無料で貸し出してくれるという申し出であった。車で大阪南部のS電器まで取りに行った。見て驚いた、当時のプロジェクタは、液晶プロジェクタが出る遙か前で赤、青、緑の三管式と呼ばれちょうど飛行機内にあるプロジェクタと同じで車に入らないほど大きく、重量も30kgを超えていた。

プロジェクタをいくつかの部品に分解し、車に入れた。スクリーンも持って来てくれたが、これは車に入らなかった。スクリーンを使わなくても白い壁なら問題ないだろうということであった。

大阪金型機械にはすぐに連絡し、トレーニングは月曜日からスタートするが、前の土曜日にプロジェクタのテストと打ち合わせで朝から会場を使わせてほしいと頼んだ。

月曜日になった。

土曜日のテストで多くの問題が見つかった。まず部屋をかなり暗くしないと投影画面が見えにくいということで、部屋のカーテンを閉めると、今度は手元が暗くなり、入力用のタブレットの文字や絵が見えなくなった。後は電灯のつけ方を工夫したりして妥協点を探った。

次にはソフトについているA I C A Dのマニュアルだけでは十分でないことがわかり、急遽手製の補助マニュアルを作った。また1週間でマスターという目標のために、毎日の復習を兼ねた問題集も作った。そんなこんなで土曜、日曜はほとんど寝る時間がなかった。トレーニングは月曜から金曜まで、4時間づつ計20時間かけて行われた。

パソコン用プロジェクタを使ったトレーニングは恐らく日本で始めてではないかというくらい珍しく、関係のない部署や、親会社の大阪機械からも見学者が来た。見学者のほとんどが以前から小林をよく知っていた。

今まで大勢の人のトレーニングやセミナーはOHPやスライドが使われていたため、手元のオペレーションがスクリーンにそのまま映し出されるプロジェクタに皆見とれた。トレーニングは大成功であった。

トレーニングが終わった後、親会社の大阪機械や関連会社の人達が小林にあいさつに来て、是非次は自分のところでという話になった

小林はトレーニングが終了した金曜の夜に崎田にお礼の電話をした。

「崎田さん、無事トレーニングが終わりました。いろいろ手回ししてくれて、ほんとに感謝してます。」

崎田は普段反骨精神からか、ふてくされた態度を常としているので、面と向かって感謝されると気恥ずかしく、返事に困り、すぐに別の話題を取り出した。

「ああそれはそうと、守山君が中田興業辞めたん知ってる？」

「えっ」

と言ったまま、小林は言葉に詰まってしまった。

「なんか事情があったんやろな、俺に泣きついてきて、俺もかわいそうに思たんでA I C

ADジャパンに口利いてあげたわ。たぶん来週くらいからAI CADで働くんちゃう。」  
帰国してから守山からも中田からもアプローチがなかったの、どうなったのかと思っ  
ていたが、結局自然な流れになったようであった。それにしても崎田の侠義とそのパワー  
には恐れ入った。自分は自分のことで精一杯で、他人の面倒など到底みれない。

「さすがは崎田さん。」

と普段「さすがは小林さん。」と崎田がからかい半分で言っているフレーズをパロディーっ  
ぽく言ったが、本当に崎田には心から感謝していた。崎田にも小林の気持ちが伝わって

## 第九話 梨絵さん

それから大阪機械、その関連会社と次々とトレーニングの注文が相次いだ。さらに大阪機械の社長にパソコンの使い方を教えることになり、CAD以外のトレーニングもスタートした。

大阪機械の社長は、今までパソコンを触ったことがなかったが使い方がわかると自分用にPCを購入し、少しずつ上達していくのが楽しみで社員にも自慢するようになった。取引先の社長にもゴルフの時などに大いに自慢したため、今度は取引先の社長からトレーニング依頼を受けた。

そして小林のスケジュールは一ヶ月先までフルブッキングされていた。

小林は少し落ち着いた。そして前から気になっていたことが少し余裕が出たために持ち上がってきた。オーストラリア帰国後、梨絵と連絡が取れていないことであった。

梨絵には一度オーストラリアから絵葉書を出したが、帰国後、連絡していなかった。一つには男のプライドで、梨絵に対して惨めな状態の時に電話をしたくなかったということがあったが、会社に電話する訳にもいかず、自宅に電話するのも家族が出る問題があるので、連絡そのものが簡単ではないという事情があった。逆に梨絵からも連絡がないのが気になっていたが、自分の生きる道を確認してから連絡したほうがよい、と自分に言い聞かせて痩せ我慢していた。結局、次の日の土曜日の夕方、町田の自宅に電話して様子を聞いてみることにした。

「小林さん元気ですか？」

電話口で懐かしい町田の声がした。

「オーストラリアどうでした？君江さんと会ったって絵葉書に書いてありましたね。」

「ああ君江さん、とっても元気にしましたよ。英語もぺらぺらになって。」

「へえ、すごいですね。それはそうと小林さんが辞めてから会社の空気がすっかり変わってしまいましたよ。今や、新人が幅を利かせて僕なんか隅の方に追いやられています。」

町田は笑いながら話していたが、どうも実際は深刻そうであった。

「梨絵さんはどうしてる？」

小林が聞いたが、町田はしばらく黙っていた。小林は心配になってもう一度聞き直したところ町田が重い口を開けた。

「あの、梨絵さんと社長とちょっと問題があって梨絵さん、今週一杯休んでましたけど。」小林は町田の思わせぶりな言い方が気になった。町田は何か隠していると思った。

「悪いけど、教えてくれないかな。何があったん？」

町田にしては慎重に言葉を選ぶようにゆっくりと話した。

「実際に梨絵さんに聞いた訳やないけど、うわさでは、どうも出張先で社長が酔っ払って梨絵さんに抱きついたみたいですね。それで梨絵さん社長の頬を平手打ちした言うて。」

「ほんまかいや？」

小林の頭に社長がいやがる梨絵に無理やり抱きついたイメージが浮かんだ。

「それ、誰から聞いたん？」

「兄の田村部長がそんなこと言うてたという、あくまでも噂ですが。」

小林は、居ても立ってもいられない気分になってきた。月曜まで待てない、すぐにでも梨絵に連絡を取りたくなった。

「町田さん。僕が梨絵さんの家に連絡すると色々まずいことがあるので、すまんけど、町田さんが今梨絵さんに電話して、僕のところに電話してもらおうように頼んでもらえないかな？頼むわ、なんかすごく心配になって来た。」

「わかりました。やってみましょう。」

町田はそう答えて電話を切った。それからの時間が、小林にとって永遠に長い空白に思えた。と突然電話のベルが鳴った。

「もしもし」

という声は町田の声であった。

「梨絵さんが用事でいなくて、電話口に前の社長が出てきたんやけど、僕の方に電話くださいとメッセージ残しましたから、多分こっちに電話かかってくると思います。」

そう言って電話を切った。

結局その日夜遅くまで待ったが、梨絵から電話がなかった。小林は日曜日も一日中電話の前に釘付けになっていた。そのためどこにも行かず自宅にいた。

夕方電話のベルがなったが、取ってみるとまたもや町田であった。

「すみません。今梨絵さんから電話あったんやけど、小林さんと話したくないと言うてました。声でわかったけど、相当疲れてたみたい。」

小林はショックで、今からでも梨絵に会いに行きたくなったが、こんな夜遅くに家に押しかけると彼女にも迷惑がかかることでもあるし、週明けまで待つことにした。土曜から月曜にかけて、今までで一番長く、苦しい週末になった。

月曜日になった。

朝は出張トレーニングがあり、昼から会社に電話をして町田を呼んでもらった。辞めてから初めて会社に電話をしたので少し緊張したが、梨絵のことを思うと小さなことであった。町田が偶然電話口に出た。町田は勘が鋭く、小林の名前も梨絵の名前も呼ばずに会話をした。

「あのまだ来てません。あれから変化ありませんが。」

小林は

「総務部長は会社に来てる？」

兄が会社に来てるかどうかを尋ねた。

「ええ、今来られてます。」

そこで小林は思い切って彼女の家を訪ねることにした。

彼女はまだ前社長、専務である両親と一緒に大阪市の北にある千里丘という高級住宅街に住んでいた。訪れたのは初めてだったので、その大きな黒塗りの門構えに圧倒された。門は通常開けてあるらしく5メートルほど先に玄関が見えた。ただ門のところにインターフォンがあり、これを押すようになっていた。思い切ってインターフォンを押したが何の音もしないために故障しているのではと思いながら少し待った。

「はい、どなたですか？」

という声は梨絵の声であった。小林の頭の中は一瞬真っ白になって、言葉が出なくなってしまった。辛うじて、

「小林です。」

と言った。しばらくすると玄関のドアが開いて梨絵が出てきた。びっくりしている梨絵に

「やあ」

小林はそれだけ言って手を上げた。梨絵の驚いた顔はうれしいのと、会いたくないのといろんな感情が混ざって、モルフォ蝶のように角度によって微妙に色が変化する不思議な表情をしていた。小林もどうしてよいか分からず立ちつくした。その時小林の背後から声がした。

「あれっ、小林さんと違いますか？」

振り向くと、元専務の幸子であった。元社長の田村弘明も一緒であった。

幸子はとてもうれしそうな顔をして、

「オーストラリアに行かれてたんですね。わざわざ尋ねていらして。さあどうぞ中に入ってください。」

と居間に小林を通した。元社長夫妻が小林の前に座って梨絵はお茶を入れに行った。田村弘明が懐かしそうな表情で切り出した。

「いかがですか？独立されたと聞きましたか。」

「ええ、今個人で仕事をしています。」

「やっぱり、CADですか？」

「ええ、できるだけCADの仕事を取りたいと思っていますのですが、やはり個人となると限界があってコンピュータ教育全般というように、拡大してお客さんを取っています。」

「へえ、教育ですか？」

と弘明が感心したような声をあげた。

「目の付け所がいいですね。私共もコンピュータ会社を経営していましたが、自分自身は何も分かっていませんでしたから、どこかで教えてほしいと思っていただけなんです。うまく行くかもしれませんね。」

「そうだといいいのですが。」

小林は、現実には厳しいというようなニヤンスで言った。

幸子が、

「小林さんなら大丈夫。根性がありますから。」

太鼓判を押した。それからしばらく沈黙が続いた。誰もが小林が何のために来たのか分かっていたので、その話題を避けようとして会話が途切れた。梨絵がお茶とお菓子を小林の前に置くと、弘明と幸子は用事があると言って自分達の部屋に行ってしまった。

梨絵が小林の前に座った。

梨絵はじっとして小林を見ているようであったが焦点は涙でぼやけていた。そして搾り出すような声で言った。

「わざわざ来ていただいてありがとうございます。私を覚えておいていただいて・・・」

そう言うと涙が一つぶこぼれ、続けてどんどん大粒の涙が溢れ出したために収拾がつかなくなり一旦席をはずした。そしてどこかで涙を拭いて戻って来た。小林はこういう場合事の真相を聞く必要もないだろうと判断した。時によって問題解決は事の真相を知ることだけではないと思った。

すると梨絵の方から話しかけてきた。

「ごめんなさい。でも私、今何も言いたくないんです。」

小林はうなずいて、別のことを尋ねた。

「わかった。でも会社の方はどうするの。」

「辞めます。」

はっきりした声ですぐに返事が返って来た。小林はこれ以上ここにいたら返って迷惑だと思った。

「じゃあ、また落ち着いたらもう一度お邪魔しますから、今日はありがとう。」

席を立てて挨拶した。梨絵は玄関に向かおうとする小林を慌てて追って背後から、

「あの、小林さんのとこで働くことができます？」

と言った。

小林は梨絵が予想もしなかったことを言ったので、ビックリした。振り向いて、  
「僕、まだ事務所もなく、1人で生きていくのがやっとなんです。梨絵さんだったらいくらでも再就職先はありますよ。」

と励ましたが、梨絵は小林から視線を少しだけずらせて、

「あの、事務所を構えられたら、是非呼んで下さい。わたし自分の食べることくらい自分でなんとかしますから。」

小林はただ微笑みただけで玄関に向かった。

「ご両親によろしく。」

そう告げて返ろうとした時、梨絵の方から握手を求めて来た。小林が梨絵の小さな右手を握ると梨絵は強く握り返した。そしてまた涙が出てきた。

小林は、しばらくして手の力を抜いたが、梨絵の手はずっと力が入っていて手が離せなかった。

「元気出してください。僕が、以前会社を辞める時、梨絵さんが励ましてくれたんで、今まで頑張っただけなんです。」

感情が高ぶったせいか、とても大胆なことを言った。梨絵は溢れ出た涙を拭くために握手していた手を離し、涙を拭って笑い顔を作った。その時の笑い顔が小林の中で何日も残像として残った。

第1部了